

早稲田応用化学会報

Bulletin of The Society of Applied Chemistry
of Waseda University

「応化会活性化特集号」

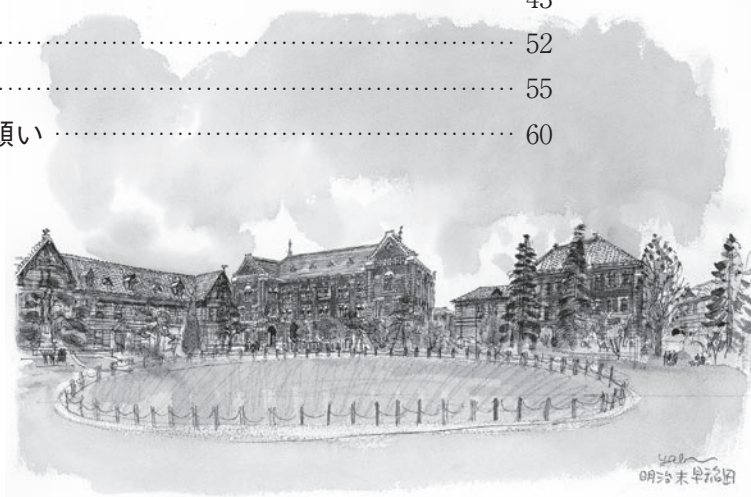


明治末早稲田

No.72
November 2005

目 次

巻 頭 言	散じて集まり 清水功雄	1
総 説	早稲田大学の知的財産戦略 藤本暁一	2
特 集	応化会活性化委員会活動について 中川文博	5
	基盤強化委員会の活動 柳澤亘	6
	広報委員会の活動 長谷川和正	8
	交流委員会の活動 田嶋喜助	9
	募金委員会の活動 河村宏	11
	雑感 河村宏	15
トピックスⅠ	第2会フォーラム講演会	
	イノベーションと国際競争力 原 陽一郎	17
トピックスⅡ	スペイン歴史の旅 西川和子	21
平田彰先生のご退任に伴う記念行事の報告	常田聡	23
職場だより	国立循環器病センター研究所	27
会員ひろば		29
学生部会		33
応化教室近況		35
新博士誕生		38
早慶ワークショップ2005年		39
同窓会報告		40
会員だより		43
お知らせ		52
2005年度定期総会議事録		55
「会費自動支払制度」登録のお願い		60



巻頭言

散じて集まり

応用化学科主任教授 清水功雄



「集まり散じて 人は変われど 仰ぐは同じき 理想の光」

早稲田の関係者ならおなじみのフレーズです。早稲田で学んだ学生が広く社会で活躍していく様子が感じられ、最も好きなところです。応用化学会の同窓諸氏も様々な活躍の場でそれぞれのころざしを全うしているものとお喜び申し上げます。

理工系高等教育の使命は、専門教育を通じた人材育成にあり、大学の施設も課程も教員構成もすべてそのために企てられ、これらの「研究教育」リソースに素養ある若者が集い、人材の醸成の場として社会的に活用されています。圧巻して「役に立つ大学」として社会の評価を得ている大学で、わが応用化学科でも毎年、優秀な若い人材フラックスを輩出し続けているものと確信しています。現在、知識情報社会、少子高齢化、ジェンダーフリーへの急速な対応、欧米優位からアジア諸国の台頭、「キャッチアップからフロントランナーへ」、物質社会から持続的循環社会へのソフトランディング、イノベーション経営等々、これらのことばに含まれるように社会環境が大きく変化してきています。この情勢変化におし流されることなく柔軟に対応し、時代を舵取りできる人材が求められているものと思います。ワセダが誇りとするノンマニュアルでインスパイアできる卒業生の活躍はますます盛んになることと推察しています。

これまで、大学教育は国立と私学の2リーグ制でした。先端科学技術を競う研究の場では、オールスター、日本シリーズのようにリーグを超えた統一ルールであることはいうまでもありませんが、国立大学の独立法人化に伴う変化は、同時に私学の伝統である自由闊達な活動思想に接近し、不公正な財政的な支援は変化しないものの、教育研究に関しては事実上の1リーグ制となっています。私学でもさらにグローバルな展開をする必要があり、今後100年も世界レベルで機能しうる教育研究のあらたな基盤づくりが必要です。このための施設、課程、学科、教員構成を含め理工学部自身もリストラクチャリングも不可欠であり、早稲田大学理工系では2007年から新たな体制で研究教育に臨むことを決意し、着々とその準備を進めています。施設整備についてはご寄付等のお願いをしていますので、今後とも同窓会諸氏のご好意を大いに期待するところです。

体制がどう変化しようと大学の評価は輩出する校友の活躍することそのものにあることに変わりありません。校友が大学を離れた後も大学の活躍を期待するように、反対に大学にいて楽しいことは、早稲田の関係者の早稲田大学外での活躍を聞くことです。応用化学会は社会で活躍する応用化学科卒業生全体と応用化学科をつなぐ唯一の活動母体です。応用化学科としては、今後とも活躍する諸氏の応援をさせていただきたいと思います。昨年より、応用化学会有志方々の発案により、応用化学会のリストラクチャリングが進められ、ますます応用化学会諸氏のお互いの交流が盛んになるものと期待されます。「集まり散じる」応用化学科と「散じて集まる」応用化学会の協働により、「理想の光」を求め続けたいと思います。

早稲田大学理工学部応用化学科 主任教授 本会副会長

総 説

早稲田大学の知的財産戦略 ——いま大学に問われているもの——

藤 本 暲 一



はじめに

全国の主要大学に知的財産本部が設置され、技術移転やベンチャー企業の育成、特許取得の促進などの動きが本格化してからほぼ2年。早稲田大学でも文部科学省の知的財産本部整備事業の指定を受け、2003年9月に知的財産本部を発足させた。もっとも早大における知的財産の活用、なかんずく特許をベースとした産学官連携活動への取り組みは国の施策に先行して行われてきた。その点からも、早大における知的財産本部発足後の活動は、そのために必要な規定類の整備などに加え、系統的な取り組みによる効果的な推進を目指したものといっても良い。その点では、他の国公立大学に比べて大きな実績も上げており、内容面でも他に例を見ないユニークな取り組み、優れた活動を伴っていると言っても過言ではない。ここでは、早大の知的財産戦略について概要を紹介する。

1. 産学官連携への視点

大学は研究と教育の場であり、大学人は研究成果を教育を通じて社会に広めることが使命とされてきた。学問の自由、大学の自治はそのための欠かせないルールであり、早大はその点でも大きく社会に貢献している。

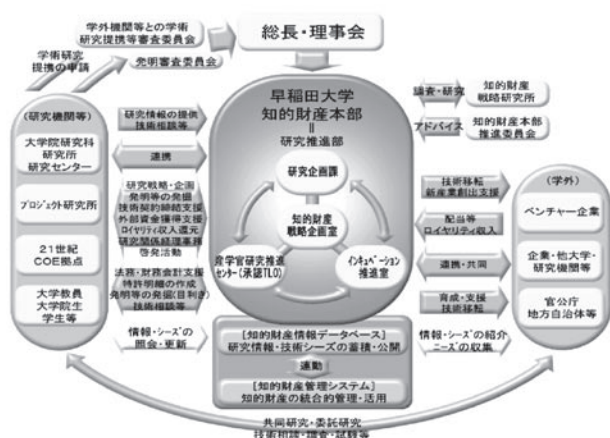
しかし今日、急速な科学技術の進展が国民の生活に大きな影響を及ぼすとともに、IT社会の成熟が社会経済の仕組みを大きく変化させている。その結果、自然科学ばかりでなく、社会科学、人文科学など、大学が培い生み出してきた知的成果を効果的に活用することが、豊かな国民生活と経済の発展と維持に欠かせない条件となっている。

また、バブル経済崩壊後の日本産業の再生への期待も、大学に求められた。優れた人材の育成とともに、画期的な製品開発に結びつく研究成果の発信が課題となり、大学と産業界との協力も大きなテーマとなった。そのこともあり、大学に存在する知的財産の活用が、研究と教育に次ぐ大学の第3の使命として認識されるに至ったといえる。

知的財産本部の設置は、そうした社会的要請を受けたものである。とはいえ、早大ではそれ以前から様々な形で知的成果の社会に向けた発信活動を行ってきた。知的財産の活用と技術移転など産学連携活動に限っても、その取り組みは、他の国公立大学に比べはるかに先行していることは間違いあるまい。

ただし、大学における産学官連携では踏まえなければならない幾つかの原則があるのも確かである。

早大における知財活用・産学官連携の推進体制



早稲田大学知的財産本部参与及び知的財産戦略研究所教授
(昭和44年応用化学科卒・新制19回)

2. 知的財産の活用における原則とは

早大の知的財産活動の基本的な視点は、2004年7月に発表した「知的財産に関する基本理念」にまとめられている。全文を紹介するのは紙面の都合で無理なので、ここではその趣旨を要約した「知的財産憲章」を紹介するにとどめる。詳細は早大のホームページ (<http://www.waseda.jp/rps/oip/ip-policy.pdf>) を参考にしてもらいたい。

早稲田大学知的財産憲章

1. 早稲田大学は、建学の理念に則り、学問の自由と独立を堅持し、世界に誇る知の拠点として、真理の探究と学理の応用に努める。それらの成果として、優れた知的財産を不断に創出し、もって世界の学術文化の増進に多大なる貢献を果たす。
2. 早稲田大学は、自己の創出した知的財産の重要性を深く認識し、これらの蓄積を進んで活用し社会に還元することにより、学術文化の増進とともに、世界の平和、人類の福祉および社会の発展に資する。
3. 早稲田大学は、知的財産に係る活動について、国内外の多様な機関や個人との連携協力を積極的に推進する。これにより、関連する資源などを最大限に活用し、学術および社会的貢献を果たすとともに、本大学の教育研究活動などの一層の活性化を図る。
4. 早稲田大学は、知的財産に係る活動に対して、果敢かつ着実に取り組む人材を育成し輩出する。これにより、自己および他者の創出した知的財産を尊重し、学術や社会の発展に役立てる精神と能力とを有する人材が、世界の多分野で活躍することを目指す。
5. 早稲田大学は、知的財産全般について、適切な管理運営を行うとともに、関連する情報を幅広く学内外に開示する。これにより、知的財産のより効果的な活用を図るとともに、大学に課せられた説明責任を果たし、厳正な点検評価とその実践への反映に資する。

ここで重要なことは、産学官連携では、カウンターパートとなる企業や各種団体の利益とともに、大学における研究と教育にどのように貢献できるかということである。共同研究や大学が持つ特許の移転が特定企業の利益になるだけで、大学にとって意味がないものであったり、受益内容が著しく偏ったものであるなら連携する必要はない。対等の立場で、双方にとって価値ある協力こそが重要なのである。

また、その結果、学生の教育を受ける権利が侵害されたり、軽視されるようなことがあってはならない。早大では『基本理念』の中で、「学生の教育を受ける権利」への配慮を強調しているのはそのためである。さらに、産業界との協力の過程で、大学教職員等が金銭的な不明朗な関係を持つなどで社会的な非難を浴びるようなことがあってはならない。大学は私学といえども公的な使命を負っており、それ故に社会から高い尊敬を得ているからである。

早大は、知的財産の活用と産学官連携の推進にあたり、こうした原則を踏まえたうえで取り組んでいる。

3. これまでの取り組みと実績

まず、早大における産学官連携活動の経緯を簡単に紹介する。1996年に、今日という技術移転機関(TLO)にあたるものとして学外連携推進室を設置、98年には大学教員が所有する特許を民間企業に有償で提供する技術移転活動を手掛けはじめた。その結果として、99年には「大学等技術移転促進法」に基づく技術移転機関として承認され、2000年に知的財産センターとして体制の整備が図られた。それと軌を一にして、大学教職員による発明を大学所有の特許として取り扱うための「職務発明規程」を制定した。さらに2002年には、知的財産センターがさらに拡充強化されて産学官研究推進センターへと衣替えしている。

ベンチャー企業の育成でも、2001年にインキュベーション推進プロジェクト室を発足させるとともに、旧早稲田実業学校跡地にインキュベーション施設を開設した。同施設は現在、学生ベンチャーなどの活動の拠点として利用されており、早大発ベンチャー企業の数が他大学を凌いでいる大きな要因でもある。ちなみに、2004年8月時点で筑波大学の菊本虔教授がまとめた大

学発ベンチャー企業の実態調査の結果を示す。

大学別ベンチャー数ベスト10

順位	大学名	ベンチャー数
1	早稲田大学	65(50)
2	大阪大学	46(28)
3	慶應義塾大学	43(34)
4	京都大学	37(21)
5	東京大学	33(21)
6	筑波大学	30(14)
7	日本大学	29(13)
8	東北大学	27(18)
9	北海道大学	26(13)
10	九州工業大学	24(13)

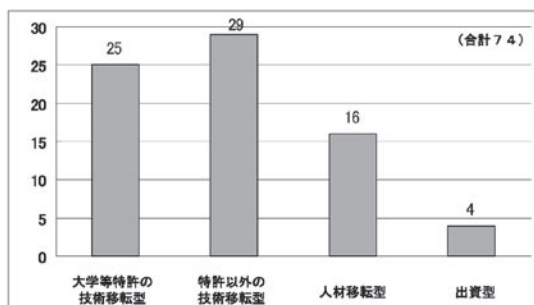
(注)カッコ内は前年度

参考:筑波大学等による大学発ベンチャー調査資料より
(2004年8月時点)

早大発ベンチャー企業の特徴は、大学教職員の研究成果をもとにした技術集約型の起業ばかりでなく、学生が中心となって発足させたビジネスモデル型起業が多いことである。悪くいえば、学生のサークル活動の延長上とも見られなくもないが、実ビジネスを学ぶ場としては手なビジネススクールを凌ぐ教育効果も挙げている。

もちろん、学生の限られた知識と経験によるものであるため、大学としてもインキュベーションマネージャーなどを配置して経営や資金対策などでアドバイスをしている。仮に失敗しても、再チャレンジする機会があるという意味でも早大の学生らしい試みが行われており、将来わが国産業界を担う人材の輩出を期待したいと考えている。

早大発ベンチャー創出実績(型別)



(2005年3月末現在)

4. 知的財産本部の位置付け

2003年9月に発足した早稲田大学知的財産本部は、2002年に大学本部の教務部から分離して発足した研究推進部を母体に行っている。正確に言えば、研究推進部＝知的財産本部と位置付けられており、知的財産の活用に係わる業務の側面から見た場合に知的財産本部と呼んでいるといった方が分かりやすい。研究推進部の役割は、大学教員などによる研究や学外組織との連携、TLOに係わる業務を効率的・統一的に行うことを目的としており、日常の学内業務の面で研究推進部が教職員や大学院生をサポートしている。

知的財産本部は、研究推進担当常任理事(副総長)を本部長に、知的財産活動の戦略を打ち出す中枢部門と、実務部門で構成されている。実務部門は、技術移転に取り組んでいる産学官研究推進センター(承認TLO)と、ベンチャー支援など実務を担当するインキュベーション推進室からなっている。

主要な業務は、①知的財産戦略の企画・推進②知的財産の創出③知的財産の管理④知的財産の活用⑤知的財産に係る啓発⑥インキュベーションの推進⑦研究活動・産学官連携の推進の7項目である。具体的な活動などはホームページで確認してもらえるとありがたい。

【特集】 応化会活性化委員会活動について

応化会活性化委員会

委員長 中川文博

(昭和32年応用化学科卒・新制7回)

1：活性化委員会発足の経緯と狙い

(1)経緯

平成16年5月24日の応化会総会の席上、最近の受験生の中に早稲田に合格後、慶應大学を含む他の有力校を選択するケースがあるとの問題提起を受けて、行動し易い60~70才代の会員でチームを組織して、応化会の活性化について検討するよう宿題を戴き、6月21日応化会活性化プロジェクト発起人会を開く運びとなりました。

発起人委員会では冒頭の主旨説明で「金銭的な支援」に重点が置かれたため、活性化の核心は何か、奨学金の支給効果はどの程度あるのか、早稲田を志望する学生は早稲田の全体像とランク付けに注目しているのではないか、論文件数でも早稲田は上位に見られず、某社の研究助成金獲得リストも他の有力校は伸びているのに、早稲田は平成10年以降減っていて、学生がきたがる雰囲気作りが足りない等の意見が出ました。これに対し、ここ数年早稲田も変わりつつあり、特に応化の先生は頑張っていて、学外からの助成金もかなり獲得しており、また、学生への奨学金の支給は大きな支援になっている、との黒田先生の説得力あるお話がありました。

まとめにはいる段階で、我々は大学卒業後応化会の運営にどのように関わってきたのか、一部の熱意ある有志に全面的に依存したり、本来教育と研究に専念すべき先生方の貴重な時間の邪魔をしてなかったか、会費の納入率も思わしくなく無関心過ぎたのではないか、との反省に立ちこの日の議論を踏まえて取り敢えず、①広報委員会 ②交流委員会 ③募金委員会を設置して、具体的な作業を開始することになりました。

8月6日の2回目の会合を応化会活性化委員会準備会と改称して、応化会業務全般を掘り下げて検討するため、募金委員会を基盤強化委員会と募金委員会に分け、8月30日には名称を「応化会活性化委員会」とし、9月2日の役員会で承認されました。

(2)狙い

①応化会組織の強化

今まで応化会会員と応化会のチャンネルは、極論すれば応用化学会報のみで、これも会員総数の半数に充たない数しか会員に届いていません。会費納入の払込用紙も届かないので会費も納入されていません。現在進めている範囲を拡げた評議員の役割が徹底すると、会員への情報伝達範囲が広がり、劇的に改善されたHPによって情報の伝達が加速化され、情報の双方向性が容易になります。また、活性化活動を通して多くの会合がもたれ、その関連で先生方や役員との意見交換が増え、講演会とその後の懇親会では多くの学生と懇親を深めることができました。これらの積み重ねが会員相互の交流の輪の広がりに寄与し、組織の強化につながることを期待しています。

②応化会財政基盤の強化

応化会の財政は、会員からの会費で成り立っていますが、納入率が30%以下ではたいした活動もできず、これを50%以上に引き上げる必要があります。そのため、応化会の活動が全会員に、目に見えて納得してもらえよう活性化各委員会が努力しています。ここで、早稲田応用化学科に4年以上籍を置かれた皆さんにお聞きたい。卒業されてから今日にいたるまでを振り返って、大学生生活で誰にも、何もお世話になったことは無いと言える人がおられるでしょうか。

私が入社した頃、現場の運転員の中に有名大学に進学出来る能力を持ちながら、経済的な理由で大学進学を断念せざるを得ない人が大勢いました。その彼等の『我々は憧れの大学へ行けなかったが、大学出の人にとって、4年間の学生生活でお世話になった多くの先生・友人達との交流で得たものは、その後の人生経験に計り知れないプラスになっていると思う。』との話に謙虚に耳を傾けて頂きたい。お世話になったという感謝の気持ちをお持ちの方は、現在進めている各活性化活動にご協力いただけるものと信じております。

2：これまでの活動全体の総括

各委員会活動の詳細については、各委員長報告にゆずりますが、各委員会活動が本格化して1年、この短い期間にボランティア活動で、ここまで実績を積み上げてこられた活性化委員の方々のご努力に、委員長として心から感謝申し上げます。

3：活性化委員会に残された課題

これからは、早稲田応化会に係わる者全てが

基盤強化委員会の活動

平成16年6月に開催された第1回早稲田応用化学会活性化プロジェクト発起人会においてプロジェクトを推進する広報、交流および募金の3委員会の設置が決まりました。しかし応化会の現状から見て、このような新たなプロジェクトを推進する上でも、会の基盤が弱く、これを早急に強化することが極めて大事であり、そのために1ヵ月後の打ち合わせ会で3委員会に平行して、別に基盤強化委員会を設置することになりました。

基盤強化委員会の活動は同年8月から始まり、早いもので1年が過ぎましたが、「基盤」とは何か、この間、何を強化したのか、実施してきた活動の内容と、さらにこれから進めようとしている活動について以下ご説明し、会員の皆様のご理解と一層のご支援をお願いいたしますと存じます。

1. 会員名簿の完備

校友会や親睦会などの団体では会員名簿は欠かすことのできない活動の根幹であります。早稲田応用化学会（以下、応化会と呼ぶ）は7000名を超す会員を有し、会の活動に必要な会員の個人情報収集・保有し、名簿の管理をいたしております。しかし、近年、毎年、会員の増加、会員の移動等により、その見直し・整備が十分に行われておらず、例えば会誌の送付、総会案内など会員宛に郵送したものが、多数、住所不明で返却されてきております。応化会と会員との円滑な連絡ができることが活性化の第一歩であると認識し、会として必要な最新の会員情報を常に持つように、まず会員名簿の整備に

自覚を持って自ら行動し、お互いが連帯意識を持ち続ける必要があります。そのためにも、あらたに選出された評議員に積極的に活動願い、同時に多くの方々に活性化のボランティアに参加していただくことを希望します。

また、近い将来活性化各委員会を応化会の組織に吸収する場合、今と同じような活動力を維持していくためには、役員会の役員の構成、組織替え等、あらたな見地から見直しが必要ではないかと思えます。

基盤強化委員長 柳澤 亘
(昭和33年応用化学科卒・新制8回)

着手しました。

従来、手書きの名簿台帳で管理されていたものを、新たに名簿管理用のソフトを購入し、パソコンでの管理に切り替え、すでにほとんどの個人データを入れました。

また、会員の死亡、住居移動、勤務先変更などの移動情報が的確に把握できないことに対し、今後、後述するように評議員の皆さんのご協力をいただき、仲間の移動を会に連絡していただくような取り決めとか、ホームページにおいてご本人よりその移動を直接、書き込み、ご連絡いただくなど新しい仕組みを構築していくことにしました。

昨今、話題になっている個人情報保護の問題については真剣に検討しており、この問題は後に述べます。

2. 会費納付率向上

応化会の活動資金は会員から納付される年会費であります。昨今この納付率は低減の方向にあり、全体の活性化活動を進める上でも、この納付率を上昇に転じさせ、現状の納入率30%弱を、早急に40～50%まで上昇させたいと取り組みはじめました。特に若い世代の会員の納入率が低く、是非、自分たちの会であるとの認識をもたれ、欠かさず納付に努めていただきたいと願っております。

納付手続きを簡便にするために、従来の郵便局での振替方式だけでなく、銀行・郵便局での自動引き落としなど事務局にていろいろと検討していただいております。また、いつまで納付したか不明な会員には事務局へメール、電話、

FAXで、あるいは応化会のホームページの中での書き込みでお問い合わせいただければお答えいたしております。

昨年末頃から、しばらく納付が途絶えていた会員からの納付が再開されたり、会費納付のお問い合わせが寄せられたり、ご理解をいただけるようになってまいりました。

また、名簿管理と同様に会員の年会費納付状況をパソコンで一括管理する方向で検討しております。

3. 評議員の活性化と評議員会の設置

応化会の活性化は一部の会員だけで活動してもその成果は期待できません。できるだけ多くの会員にご認識していただき、一緒になって活動していただくことが必要であります。

従来、評議員は卒業年度別に1、2名の卒業生に委嘱いたしており、なかには同期会の世話役として積極的に仲間をまとめておられる方もおられますが、多くは有名無実のようで、会の活動には関わりが少なかったようです。そこで今後は評議員の皆さんに活性化の担い手として活動していただくことにいたしました。評議員は3つのグループから選出します。第1は卒業年度別同期会から各2～3名（同期生100名未満では2名、100名以上では3名）を選任します。そして同期会の開催、同期生の消息把握、本会の活動状況の伝達と会員の意見聴取とその連絡などをしていただきます。第2のグループは研究室同門会より各1名を選任していただきます。昨年末から本年初めにかけて、応化の研究室同門会の現状について調査いたしました。その結果はすでに応化会のホームページで報告いたしましたとおり、多くの研究室同門会はよくまとまって定期的な懇親会を開いております。応化会は研究室同門会とも親しい繋がりを保ち、相互に協力して活動していきたいと願い、そのために同門会からも評議員を選出していただくことにしました。同門会の集まりが途絶えているところには再興するようお手伝いをしていきます。第3のグループは学生会から選出した評議員で、学部は各学年3名、大学院修士課程は各学年2名が選任されます。応用化学科の学生も応化会員であり、年会費も納めていただいております。学生時代から応化会の会員としての自覚、認識を持っていただき、先輩

と積極的に交流することは良いことであります。すでに活性化委員会と学生会の代表との懇談会を開催し、理解を深めていただきました。

そして、このように選ばれた評議員とは連絡を密にするとともに、全員が集まる評議員会を設置し、年に1回は定期的に会合を開きます。既に本年は5月12日に卒業年度別選任評議員にお集まりいただき第1回評議員会を開催しました。秋には研究室同門会選任評議員による評議員会を、また学生会選任評議員についても別途開催する予定です。なお、来年からは全体会議方式で総会前に開催します。

4. OBボランティア制度の確立と増強

応化会の沈滞化は会活動の企画、立案、運営等の仕事のほとんどを、極めてお忙しい応用化学科の先生（副会長と庶務、会計、編集の3理事）と専従の事務局長1名に依存してきたことが大きな要因であり、OB会員として反省すべきことであります。むしろ7000名を抱える会をよく今日まで維持してきていただいたと感謝いたしております。

今回の活性化活動は時間的に余裕のできたOBの有志が活性化のために奉仕作業をしようとし、集まり、会員のためになるより良い仕事をしていこうとするものであります。そのため16年9月、活性化活動に奉仕するOBボランティアに関わる取り決め（OBボランティア制度）を確立し、施行しました。現在、活性化4委員会では28名のボランティアが登録され、活動しておりますが、今後も役員の先生方および事務局を積極的に支援していきます。今、OBボランティアの更なる増強が必要であり、ホームページにおいても募集をいたしておりますが、時間的余裕のある心ある会員の皆さんに奮って参加をお願いいたします。

5. 早稲田応用化学会会則・細則等の整備

応化会の円滑な運営をしていくため、その根幹である会則は勿論、仕事の手順を明確にする細則が必要であります。この会則・細則の整備は必要なものから着手いたします。会則はすでに見直しをし、本年5月の総会で改訂案のご承認をいただきました。

そのほか、会計管理関係、個人情報保護関係、奨学金関係、事務局一般業務関係などの細

則の整備・検討を進めております。

6. 個人情報保護に関する取り組み

本年4月1日より施行した個人情報保護法に対し、応化会は法における「個人情報取扱事業者」であり、その対応について活性化委員会内で真剣な討議を重ねてまいりました。すでに進む方向は固まってきましたが、11月の応化会役員会に応化会個人情報保護ポリシーとその細則を提案し、ご承認をいただく予定であります。

7. 相談室設置の検討

応化会活性化活動の事業として学生およびOB会員を対象に相談室を設置するアイデアが浮上し、多くの方より賛同の声をいただいております。

ますが、実現するまでに十分な検討と準備が必要であり、多くの識者を集め、設置に向けての検討会を近々開催する予定です。

最後になりましたが、基盤強化委員会を支えていただいておりますメンバーは中西克夫（昭和36年卒）、福島駿一（40年卒）、窪田信行（40年卒）、森啓（41年卒）の4君で、9月よりさらに野本暢夫君（41年卒）が加わります。なお広谷修君（44年卒）は仕事を持っていますが、緊急時に応援に来ていただけることになっており、このようなご厚志を嬉しく思っております。応用化学科と応化会の発展を祈り、会員相互のよりよき交流ができますよう皆で会を盛り上げていきませんか。

広報委員会の活動

広報委員会 委員長 長谷川 和正
(昭和37年応用化学科卒・新制12回)

1. 活動実績

□ホームページリニューアル (2005.1.05)

URL: www.waseda-oukakai.gr.jp/

教室、学生及び活性化委員会各委員会の皆さまのご協力を戴き、立ち上げることができました。会員の帰属意識の向上と卒業生・教室教員・学生の会員相互の連帯感の更なる醸成を目指し、会員の関心をかきたてる役に立つ情報を掲載しています。



会員便りでは、会員の最新の動静、同期会、同門会及び趣味の会などの開催状況を掲載しています。また、活性化委員会の活動内容については「募金案内」「奨学金制度」及び「交流会案内」として掲載しています。

会費納付案内など会員へのお知らせも充実して会員情報などもホームページで登録または更新できるような仕組みを設けました。これにより、基盤強化委員会が主体となって進めている会員名簿の更新にも役に立つと期待されています。

新着情報やお知らせなどをタイムリーに掲載するなど月間3-4回の頻度で更新しています。現在のホームページへのアクセス数は、約1,000人/月です。

□オンライン更新システムの本格運用開始 (2005.06)

ホームページの更新は、平中委員を初めとする編集委員会を設置して実施していますが、新着情報やお知らせなどは、タイムリーに高い頻度で更新する必要があるため、オンラインで更新できるシステムを導入いたしました。

□メールマガジンの配信開始 (2005.02)

交流委員会が中心となって企画している「フォーラム」などについて、開催内容等の情報を会員へ事前に配信しています。

第1回フォーラム (2005.03.09開催) 及び第2

回フォーラム（2005.7.08開催）について、それぞれメールマガジンを配信いたしました。

加えて、配信業務の効率化を図るため、オンラインによる自動配信システムの導入を検討中です。本システムは、ASP方式の活用により配信費の削減も期待されています。

□応用化学会報編集業務への協力

会報編集委員会と協力して、会報とホームページとの効率的な役割分担を見直し経費削減の検討を進めています。

□広報委員会の業務分担

業務の分担は次の通りです。なお、業務の進展により適宜見直しています。

- | | |
|---------------------------|----------------------------------|
| ①統括 | 委員長 |
| ②予算管理 | 平中委員 |
| ③会報編集委員会への協力 | 並木委員 |
| ④情報収集活動
(同門会、同期会、教室など) | 本間委員、小堀委員、
並木委員、相馬委員、
亀井委員 |
| ⑤ホームページ更新 | 平中委員、若林委員、
大西委員
米山委員（学生会） |
| ⑥メールマガジン配信 | 平中委員 |
| ⑦個人情報保護法への対応検討 | 相馬委員 |
| ⑧セキュリティ対策の検討 | 委員長 |

2. 活動における諸課題

広報委員会の活動をスタートして、関係各位

交流委員会の活動

交流委員会 委員長 田嶋 喜助
(昭和34年応用化学科卒・新制9回)

はじめに

交流委員会は講演会、企業ガイダンス、趣味部会などを通じて会員の皆様が応化会に所属していて良かったと実感して頂ける機会を少しでも増やそうと活動を行っております。応化会員の間で「応化会とは何なの？」と言う認識がありこれを払拭する努力こそが「活性化への道」であります。

応化会HP（ホームページ）<http://www.waseda-oukakai.gr.jp/> の「交流会」に最新情報があります。

の協力をいただきながら、試行錯誤で取り進めてきましたが、現在、次のような課題を抱えています。

□慢性的な要員不足

広報委員会の役割は、応用化学会（活性化委員会・学生会）及び応用化学科の諸活動について、広く会員へタイムリーに情報をお届けることとあります。同時に諸活動の活発化に伴って多忙をきたす宿命にあります。

加えて、ホームページの運用管理やメールマガジン配信などITの基礎的な知識と経験が必要な業務を抱えています。専門性の高い素養を持ち合わせの卒業生や若い学生さんからの参画を是非期待しています。

3. 今後の取り組み

□会員情報更新システムの導入推進

会員情報の保護などセキュリティの強化のため、基盤強化委員会と協力して同システムの導入を検討しています。導入後、セキュリティは、飛躍的に向上します。併せて、個人情報保護法への対応策としても期待されています。

□ホームページ制作などITスキル講習会開設の検討

広報委員会の委員を対象として、ITスキルの向上により、動員体制の拡充を図って、広報活動をより充実にしたいと考えています。

活動①「フォーラム型講演会」の企画 運営と講演後の学生、OB、先生方の交流懇親の展開。

趣意：応化会の会員相互の交流と啓蒙を意図してフォーラム型の講演会を継続的にこなうものである。

テーマは「21世紀の化学技術」「企業経営」「環境・エネルギー」「知的財産・規格」更には「学生・社会人若年層向けの会社生活に対する実用講座」等を企画し同窓の志が気脈を通ずるコミュニティが形成されることを期待しています。

講演会の実績

第1回： 2005年3月9日（水）

講師は旭電化工業（株）社長 中嶋宏元氏（37年卒）。

演題は「環境対応への取り組み」。参加者はOB70名 学生35名で盛会。

石鹸とマーガリンのイメージを電子材料等の先端素材の会社への変身させた。しかも環境問題に技術開発で正面から取り組んで、これを実現し事業を拡大した。海外への積極的な展開も話された。化学と言えば3Kとは間違いで、今や夢のある産業になっている事を強調されたのが印象的で学生のみならずOBにも感銘を与え、これがその後の懇親会の盛り上がりとなった。

第2回： 2005年7月8日（金） 演題：「イノベーションと国際競争力」。

講師：長岡大学学長 原 陽一郎氏（32年卒、前 東レ経営研究所代表取締役社長）

参加者は社会人69、教員7、学生30と非応化会員4でまたも110名の大台に乗せた。

講演を簡単に纏めるのは難しいが、「1970年から20年間に6回の激しい円高を乗り切ったのは製造業が欧米を圧倒する製品を素材から顧客の立場に立って仕上げていったからで、物まね上手からではない。然し今はハードではなくソフトウェアに基盤を置く経済へと移行しており今後の成長はハイテク産業、通信・情報サービス等である。それ故に日本の世界競争力は1位(80年)から30位(2002年)となった。企業家にはベンチャー志向が必須。日本社会はこの点に好意的ではない。大学も含めた構造改革と企業家精神なくして発展はない。」と結ばれたが、質疑を含めて2時間になろうという大熱演であった。

（応化会報本号に講演の詳細が載っておりますのでご参照ください。）

第3回のお知らせ 日時：2005年11月21日（月） 17時～20時。

講師は山形大学教授 城戸淳二氏（S59卒第34回生）。

有機ELの世界的権威である城戸先生から話題の有機ELについて開発最前線のお話、世界のライバル、将来の期待などを直接お伺いできるまたとない機会です。前2回の講演会が事業に関する領域でしたので 今回は世界で今最も

ホットな分野の話題を取り上げました。

場所：55号館1階N棟大会議室。同じ場所で前半は講演会、後半は懇親会。懇親会参加：学生は無料、OBは3000円／人。

毎回懇親会は盛り上がり特に学生諸君がOBとの接触をこんなに求めていたとは驚きです。応化会員の繋がりが実感できる機会でありこの積み重ねが会の活性化に一番重要であると確信しております。このようなホットな世界のトップに応化の方がおり、お話を直接お聞きできる事は光栄であり幸せな事です。この機会を逃す事無くご参加をお待ちしております。

最終ページに詳細の案内があります。ご参照ください。

講演会の課題：

- ・我々の現有勢力では 年間3回が限度で各分野の演題を網羅仕切れていない。
- ・講演会周知の手段はメールが主体となるが手作業による連絡応化会報の広報力も活用すべきである。

活動②「企業ガイダンス」の企画掲載企業獲得の営業、広報委員会に委ねて応化会HPへの掲載。

趣意：就職に際して会社情報をインターネットで学生へ提供するものである。

ガイダンスの構成：応化会ホームページに企業から提供の「会社紹介」「OB在籍者からのメッセージ」及び「在籍者氏名（卒業年次及び出来れば出身教室名）」を掲載する。当ガイダンスには「応化の先輩」の話や「応化卒の在籍者」が載っており、これは現在就職用に各社が設けている案内には例を見ない。

個人情報保護とセキュリティの点からこのガイダンスには学生のみアクセス出来る形となっている。

掲載会社にはメンテナンス費用として、3万円／年／社をお願いしている。

ガイダンスの実績：

今春から営業開始。9/1現在掲載済みに加えて費用振り込み済み、原稿作成中等を合計すると約20社。アイウエオ順に列記すると、旭化成 旭硝子 味の素 オージー 花王 ジャバ

ンエナジー 住友化学 大日本インキ 大日本印刷 電気化学工業 東レ 東レダウコーニング 長瀬産業 日本ゼオン 日本パーカライジング 日立ハイテクノロジーズ 古河電工 三菱化学 三菱マテリアル等々。

ガイダンスの課題：

このガイダンスは、昨年末インターネット化を大急ぎスタートしろと言う号令に押し出され、従来方式の踏襲で走ったのは早計の所があった。世の中は大きく変わっており就職ランキングで人気のある会社の中には、このガイダンスへの参加を断る傾向がある。その理由は、就職情報は応募者に公平であるべきとしており、このガイダンスのように早大応化と言う特定者のみへ情報を配布する事に強い難色を示すからである。またベンチャー等への対応も課題である。今後以下の取り組みを行なう。

① **掲載社数：**40～50社程度を目指す。ペンディング中の会社をプッシュ。新規顧客獲得を展開する。

② **掲載は**従来の企業のみでなく、ベンチャー企業も対象とする。また従来OBが在籍の会社に限っていたが、OBはいなくともOBが深い関係を有する会社の情報は掲載する。何れの場合も

1) 掲載するか否かは、順来どおり交流委員会が権利を留保する。

2) 会社の現状については、例えば会社更生法適用中等の情報は入れて頂く。

③ **掲載情報取り扱い** 以下の注意書きをガイダンス冒頭に明記する。

「ガイダンスの利用に際して

★ このガイダンスには企業から提供された情報がそのまま載せてあります。

★ このガイダンスは就職を斡旋するものではありません。

★ 就職の為の情報として利用する場合は学生自分自身の判断で利用して下さい。」

交流委員会としての活動③ 「趣味部会」

趣意：趣味の交流を通じて会員の絆を強めることを意図する。

実績：「早稲田応用化学会品川囲碁クラブ」が活発な活動を展開中。

課題：囲碁クラブ以外の部会を増設する事。各地の趣味の会活動をメール、インターネットで投稿して頂き交流の輪を広げるようにPRする。

最後に交流委員を紹介します。

田嶋喜助（34年） 平林浩介（35年）

岩井義昌（36年） 綱島 真（37年）

下井雅惟（38年） 岡本明生（39年）

河野恭一（39年）の諸氏。

特にテーマ毎の担当は設けておらず、講演会は役割を分かち合い、ガイダンスには手分けをして会社へ営業にまわり 会議に集まりそのテーマを全員で自由に討議しております。

我々は少数のボランティアで活動しておりますのでその理想とする所には道遠ですが、会員の皆様のご理解とご協力のもとで、今後も努力をいたしたいと思っております。

募金委員会の活動

募金委員会 委員長 河村 宏
(昭和34年応用化学科卒・新制9回)

昨年末発足した募金運動も漸く9ヶ月を経過しました。この間大勢の卒業生の方々からご協力を頂きました。また趣旨へのご賛同はもとより、心の籠った激励のお言葉を数多く頂戴し、此れまでの苦労が癒される感激を味わいました。中には我々の運動に感銘され、他大学のOBの方からもご協力を頂戴しました。皆様の御協力に対して衷心より御礼申し上げます。

本日現在、応募件数：約200件、募金総額：980万円となりました。詳細は表1の通りです。

今回の募金運動は、これから先10年間（平成26年度迄）の奨学金を給付するために、この2年間（平成18年11月末迄）に集約して寄付金をお願いしているものであります。応化会発足以来初めての募金活動であり、新しい奨学金制度の先駆となるものでもあります。出来るだけ多くの卒業生諸兄の参画を頂き、永続性のある制度にして行きたいと願っております。

これまでホームページ並びにご協力者へのお礼状でご報告しましたように、奨学金の一方の原資である応化会費は、様々な企画を実行に移

し、会費の増収に繋げる努力を続けております。また各種支出の総点検を行い、その合理化と効率的運用を検討中であります。然しながらこれらの試みが、具現化しますのには、今暫くの時間を要すると思われます。従いまして、当面の奨学金の給付は、募金収入で補う事と致しました。また募金活動は、更なる積み上げを目指して、残りの募集期間1年余も積極的に続けて参ります。

此れまで200名を超える方々のご協力を得ましたが、まだまだ卒業生の5%にも達していません。現在活躍中の卒業生の多くは、無関心なのか、活動が理解されていないのか、情報が行届いていないのか不明であり、何故この方が非協力的なのか理解できない方々も大勢残っています。

この際皆様には、本運動の趣旨をご理解願ひ、周囲の方々の啓蒙をも含めて更なるご協力をお願い致します。

なお、今年度の給付は、7月末募集開始、9月1日締め切り、9月末選考の手順で3名の選考を予定しております。

OB有志による推薦委員会のメンバーは、以下の通りとなりました。

推薦委員会委員

里見 多一：47年卒。49年修士修了。加藤研。応化会会長。元：新日鉄、米国スタンフォード大学修士、技術士修了。現：日本パーカラijing副社長

柳澤 亘：33年卒。石川研。基盤強化委員長。元：日本石油取締役、日本石油化学常務取締役、日石プラスト社長

河村 宏：34年卒。山本研。募金委員長。元：米国三菱商事副社長、三菱商事中国総代表、代取締役副社長。現：三菱商事顧問

旗野 嘉彦：38年卒。吉田研。元：東工大教授理学部長、九大教授、現：東工大名誉教授、佐賀大シンクロトン光センター特任教授、日本原子力研究所客員研究員

大矢毅一郎：39年卒。石川研。元：日揮、マッキンゼー、セラニーズジャパン副社長、渦激Cケム社長。現：マイクロハード会長

大林 秀仁：42年卒。宮崎研。現：日立ハイテクロジース常務

平沢 泉：51年卒。豊倉研。現。応用化学科教授

募集要項は、以下の通りと致しました。応化会による給付奨学金の特色が出せる様な選考を目指したいと思います。

今後とも皆様のご意見、ご指導を賜り度お願い致します。

2005年度早稲田大学応用化学会 給付奨学生の募集について

早稲田大学理工学研究科

早稲田大学理工学研究科では、大学院博士後期課程進学を予定し、かつ応用化学科に所属する専任教員が研究指導している修士課程の学生を対象として「早稲田大学応用化学会給付奨学金」を新設しました。

ついては、以下の要領に基づき、奨学生を募集しますので、この奨学金を希望する場合は、期限までに必要書類を提出してください。

- 1.奨学生数：3人(予定)
- 2.奨学金額：50万円
- 3.交付期間：2005年度のみ
(継続の奨学金ではありません)。
- 4.応募資格者：応用化学科に所属する専任教員が研究指導している修士課程の学生で、博士後期課程に進学予定の者。
- 5.必要書類：①修士課程における研究概要および同課程修了までの研究計画書。
②博士後期課程における研究計画書。
※①、②は、それぞれA4紙2ページ以内に要約のこと。
③指導教員による推薦状(書式自由)
④家庭および家計の状況報告書(奨学金登録票A)(理工学研究科にて配付します。)
⑤申請者の所得証明書(平成17年のもの)
※その他：応募者には、所定の誓約書への記入をお願いします(詳細は後日連絡します)。
- 6.提出期限：2005年9月1日(木)17:00(厳守)
- 7.選考日時：2005年9月25日(日)(予定)
応募者に対して、面接による審査を行います。
- 8.その他：①奨学生として選定されても、本大学院理工学研究科博士後期課程に進学せず、就職または他大学に入学等した場合には、奨学金の返還が必要となります。
②奨学生となった者は、博士後期課程修了後、応用化学専攻の卒業生の組織である応用化学会の活動への参加を求めます。

以上

募金委員会のメンバーを、改めてご紹介します。

設楽 卓也(33年卒)、趙 錫来(34年卒)、
細村 省三(35年卒)、大矢 毅一郎(39年卒)、
桜井 博(40年卒)、大林 秀仁(42年卒)、
藤本 暁一(44年卒)、柴田 実(47年卒)

以上

表 1

早稲田応用化学会給付奨学金寄付者一覧
(H17.10.18)

卒業年次	名前	寄付金額(円)	予約	現職又は出身
昭和20	加藤 忠藏	100,000		早大名誉教授
21	澤井 要	30,000		教諭
	中島 健太郎	30,000		東芝
22	手嶋 精一	20,000		新潟鉄工
	中村 英吉	30,000		東京鉱物石炭研究所
24	甲斐 久勝	10,000		日本クーバー
	奥田 建郎	5,000		奥田技研
26	新井 武二	10,000		日本冶金
	大江 昭二郎	5,000		技術振興協会
	櫻山 安彦	30,000		大和伸管
	百目鬼 清	100,000	07予約	太平洋成
	百目鬼 清	100,000	2回目	同上
	大澤 正明	10,000		東京都
	加藤 弘	20,000		伊勢化学
27	佐野 和夫	10,000		新潟工事
	和田 守雄	10,000		オルガノ
	岡田 延弘	10,000		日本シリカ
28	小泉 彰	20,000		ハマ不動産
	手塚 七五郎	10,000		ロッテ
	藤巻 稔幸	10,000		泉物産
	根岸 祐二	20,000		日本電気
29	小林 節夫	10,000		タイコテクニカル
	橋本 幸雄	10,000		新潟鉄工
	吉田 稔	30,000		古河電工
	山本 明夫	50,000		東工大教授
30	飯田 修治	10,000		飯田鉄工
	建部 孝夫	15,000		大日本インキ
	北西 泰久	5,000		帝人
	小松 崇	5,000		早来工営
	川島 利夫	20,000		メルテックス
	佐藤 一男	10,000		白洋舎
	松本 初男	10,000		東京応化
31	原 富啓	10,000		日本銅管
	清水 固	20,000		日本石油
32	山田 茂	20,000		東亜燃料
	徳本 明俊	10,000		旭電化
	野口 正則	10,000		昭和石油
	中川 文博	100,000	06予約	三菱石油
	中川 文博	100,000	2回目	三菱石油
	原田 精重	10,000		昭和電工
	今泉 徹	10,000		ニッピ
	牧野 貞夫	10,000		日本石油化学
	原田 英生	10,000		旭電化
	福原 洋一	10,000		三菱ガス化学
	丸茂 博	10,000		日本グリース

33	上坂 良次	50,000		三菱石油
	田中 達也	10,000		台糖
	柳澤 亘	100,000		日本石油化学
	設楽 卓也	50,000	06年予約	三菱商事
	中野 宗太	10,000		ミサワホーム
	山崎 幸一	10,000		日軽金
	井田 昭	15,000		ダイエフファイナンス
	余語 盛男	20,000		三菱石油
	川上 良策	100,000		モービル石油
	大矢 英男	100,000		大矢化学工業
	小松原 道彦	100,000		日本エ7、リキッド
	平田 彰	100,000		早大名誉教授
	田村 正義	30,000		大日本インキ
	相田 勝則	50,000		旭硝子
	工藤 飛車	50,000		筑波ハイテク・リサーチ
	高橋 信男	100,000		興洋化学
34	趙 錫来	1,000,000	05/06予約	曉星
	速水 清之進	10,000		千代田化工
	河村 宏	100,000	05予約	三菱商事
	興水 勲	10,000		日本化学工業
	田嶋 喜助	100,000		旭硝子
	河村 宏	100,000	2回目	三菱商事
	並木 俊之助	10,000		電気化学
	植木 至朗	10,000		三菱油化
	松崎 久	10,000		日本油脂
35	関川 吉男	10,000		藤森工業
	細村 省三	20,000		三菱石油
	平林 浩介	20,000		大日本印刷
	吉原 巳代二	10,000		三菱商事
	小西 誠一	20,000		東京ガス
	小池 隆一	10,000		九州石油
	加藤 静行	5,000		協同化成
36	小俣 欽司	10,000		トーヨーサッシ
	小柴 英昭	10,000		旭硝子
	世古口 健	10,000		東レ
	天瀬 田久二	10,000		日本合成ゴム
	中西 克夫	10,000		三菱石油
	岩井 義昌	10,000		大日本インキ
	松山 喜昭	50,000		旭化成
	村上 昭彦	10,000		東京農工大教授
	小柴 英昭	10,000	2回目	旭硝子
37	井上 成之	10,000		昭和電工
	石橋 暉彦	5,000		日本化学工業
	長谷川和正	100,000		三菱油化
	金子 勝三	10,000		東亜燃料
	中嶋 宏元	50,000		旭電化
38	旗野 嘉彦	10,000		東工大教授
	下井 将惟	90,000		東レ
	下井 将惟	10,000		同上
	相馬 威宣	50,000		ガレニサーチ
39	西川 瑛一郎	10,000		東燃石油化学
	岡 紘一郎	10,000		東レ
	追川 滋	10,000		昭和電工
	河野 恭一	50,000		ニチレキ
	平中 勇三郎	30,000		東亜燃料
	岡本 明生	30,000		三菱化学産資
	菊地 英一	50,000		早大応化教授
	大矢毅一郎	30,000		日本揮発油
	萬 肇	30,000		日本石油

40	遠藤 一洋	5,000		三菱マテリアル
	西村 啓道	10,000		旭硝子
	福島 駿一	10,000		三菱石油
	竹内 莊一郎	20,000		日本ゼオン
	桜井 博	30,000		三菱商事
	服部 英昭	3,000	後4回予約	三菱化学
	有居 晃	10,000		三菱樹脂
	窪田 信行	10,000		興亜石油
	吉崎 洋之	10,000		三菱ガス化学
	藤宗 篤雄	10,000		日本石油化学
	亀井 邦明	20,000		大日本印刷
	酒井 清孝	50,000		早大応化教授
	宮本 利雄	10,000		宇部興産
	草刈 直彦	10,000		東レ
	山口 千尋	10,000		日本鉱業
	渡辺 賢司	10,000		三菱マテリアル
	池田 規久雄	5,000		丸紅
	五十嵐桂一	5,000		三井石化
41	森 啓	10,000		東レ
42	桑原 豊	5,000		日本ボール
	大林 秀仁	100,000		日立ハイテクノジー
	三田 宗雄	10,000		日本化学工業
	市橋 宏	10,000		早大理工客員教授
43	金山 溢	50,000		アダプテック、ジャパン
44	藤本 瞭一	25,000		早大客員教授
	逢坂 哲彌	100,000		早大応化教授
	星野雄之輔	10,000		丸紅マシナリー
45	大熊 邦雄	10,000		三菱商事
	西出 宏之	50,000		早大応化教授
	長谷川吉弘	300,000		ハリマ化成
46	倉持 誠	50,000		新日本石油
	内田 洋	10,000		東京ガス
47	柴田 実	10,000		三菱商事
	里見 多一	100,000	06年予約	日本パーカライジング
	里見 多一	100,000	2回目	同上
	佐藤 文昭	10,000		三菱重工
	柴田 実	20,000	2回目	三菱商事
	岡崎 彰	10,000		三菱商事
48	有山 達郎	10,000		J F E スチール
	明渡 正勝	50,000		三菱商事
49	飯塚 弘	10,000		矢崎総業
	藤田 慎介	10,000		三菱商事
	神崎 修	10,000		三菱商事
	黒田 一幸	50,000		早大応化教授
50	齋藤 俊和	10,000		早稲田高校教諭
	山崎 隆史	10,000		新日本石油
51	平沢 泉	10,000	後4回予約	早大応化教授
53	青木 道夫	10,000		KBCプロセステクノロジー
54	和田 宏明	20,000		プリジストン
	高橋 豊彦	10,000		昭和電工
	内田 悟	10,000		新日本石油
	木野 邦器	50,000		早大応化教授
56	原 薫	10,000		イースタン
57	鳥居 永敏	10,000		三菱商事
58	菅原 義之	50,000		早大応化教授
	桐村 光太郎	50,000		早大応化教授
	福岡 哲也	10,000		三菱商事
	岡野 泰則	10,000		静岡大学
59	松方 正彦	50,000		早大応化教授

60	飯塚 正純	10,000		ツムラ
	宮坂 昭徳	10,000		三菱商事
	柳澤 恒夫	10,000		住友大阪セメント
61	武岡 真司	100,000		早大応化教授
	古川 直樹	10,000		鐘淵化学
	井村 正寿	50,000		岳南化学
62	日黒 俊宏	100,000		東京ガス
	鯉持 泰明	10,000		新日本石油
	本間 敬之	50,000		早大応化教授
	中戸 晃之	40,000		東京農工大
	余語 克則	50,000		早稲田理工学部
63	山本 康雄	50,000		高畑精工
	大塚 和永	10,000		三菱商事
	寺境 光俊	10,000		秋田大学
平元	酒井 宏水	30,000		早大理工総研
	丸山 洋一郎	80,000		J S R
平2	加藤 克久	10,000		日本電装
	藏野 裕之	10,000		サッポロビール
	門間 聰之	50,000		早大理工総研
	河高 太	30,000		三菱ガス化学
	佐竹 彰治	30,000		理化学研究所
3	岡田 裕之	10,000		三菱商事
	桜井 誠人	10,000		航空宇宙技研
4	樫木 啓人	10,000		日本学術振興会
	大石 かおり	10,000		中部大学
5	大串 建	10,000		マナビス
	新船 幸二	20,000		静岡大学
	駒場 慎一	20,000		東京理科大
6	大塚 佐和子	10,000		青山学院教諭
	鶴飼 智弘	10,000		三菱商事
	長山 和弘	20,000		三菱化学
7	小森 佳彦	20,000		産技総研センター
8	小堀 深	20,000		早大応化講師
9	石垣 壮啓	10,000		三菱重工
10	金子 正吾	10,000		住友化学
	佐藤 利行	50,000		三菱化学
11	古屋 俊樹	50,000		早大応化助手
13	松澤 雅登	10,000		三菱重工

早大卒以外教員	竜田 邦明	100,000		早大応化教授
	清水 功雄	50,000		早大応化教授
学外	林 和仁	100,000		マイクロハード
団体寄付	応化三九会①	9,000		
	応化三九会②	9,000		
	応化三九会③	6,000		
	活性化委員会ゴルフ会	10,000		
	38年13回生31名	93,000		
	35年10回生有志	50,000		
	3305会有志	48,000		
	40年(WAC40の会)有志	10,000		
	応化三九会④	7,000		
合計		7,380,000	2,490,000	9,870,000

団体寄付者リスト				
35年10回クラス有志				
安斉将夫	市原史郎	岩下敬吾	加藤静行	菊池宏光
齊藤充利	佐藤忠彦	鈴木正道	関川吉男	高島利行
田中邦雄	茅原伸光	戸村重男	平井 勝	平林浩介
星野浩一	真下剛志	宮寺 健	山口安弘	湯上 進
吉田与一郎	吉原巳代二			
				50,000

37年3305会有志					
井上成之	池内晴彦	石橋暉彦	小倉義弘	上條友久	児嶋啓三郎
志村輝明	竹田研爾	谷口徳之	綱島 真	中嶋宏元	長谷川和正
平川揚二	前島哲夫	米田和生	細田 拓		
					48,000

38年13回生					
安藤吉彌	市川嘉紀	岡本和男	門脇正敏	川田 力	吉瀬 靖一
木村茂行	国分可紀	重村義紀	島田正信	下井將惟	白田正次郎
相馬威宣	豊田常彦	南部 淳	萩原 幸	旗野嘉彦	林 辰雄
深川順正	福田暉夫	藤崎章男	二見 厚	堀内 剛	丸山征四郎
峯岸敬一	武笠英彦	保井秀夫	山川典男	吉田喜明	吉野 勝久
渡辺治道					
					93,000

雑 感

募金委員会 委員長 河村 宏

山崎豊子女史の不毛地帯と言う小説を読まれた方は多いと思う。元陸軍の参謀で戦後伊藤忠商事に入り、副会長までになった瀬島隆三氏をモデルにした小説と言われ、壱岐正を主人公とする中近東の石油開発をテーマにした物語であった。サンデー毎日に連載され、その後映画化もされた。仕事の関係で山崎さんの取材を受けるようになり、私のイラン、バイルートでの初めての海外体験も、物語の中で取り上げられた。小説の中盤でインシャ・アッラーという章があり、三菱商事の上杉隆という人物が脇役として登場する。協力の代わりに人物の容貌について、毛髪は濃く、目はぱっちり并要求したら、大変精悍な顔付きの挿絵を描いてくれた。そんな事で度々山崎女史の訪問を受ける事になった。

ある日、不毛地帯というタイトルが気になって問い質した。彼女は薄くなりかけた私の毛髪を見て笑いながら「決して毛髪のことを言っているではありません。サラリーマンは、会社のために懸命に働き、家庭をも犠牲にして地位や名誉に掛ける。しかし多くの成功者と言われる人達は、そのまま墓場に導かれて行く。何のための人生なのか顧みる間もなく、多くの人達の屍を乗り越えて来た栄達にも拘らず、その人達を思い、報いることもなく墓場へ向って行く。これこそが、精神の不毛です。そんな人達が生き、働く世界を不毛地帯というのです。河村さん！あなたも何時かその時が来たら、このことを思い出して下さい。」と言われた。物語は、主人公壱岐正が会社での最高峰の地位を捨てて、シベリヤに戦友の遺骨収拾に向かう処で終わる。

私は、現役を退き、会社の顧問となり時間の余裕が出来て来て、3年前から父の残した応用

化学科奨学金制度の遺族代表の仕事を兄から引き継いだ。この機会に父が書き残した回顧録をもう一度読み返してみた。(本書は戦後父が台湾に技術移転のため拘留されていた時代に書いたものを死後編纂したもの)

父(水野敏行、応化旧制第2回卒)は、予科時代に一度特待生となり、一年間月謝免除となった。祖父は、下谷区役所の庶務課長で、決して豊かな暮らしではなかったが、苦しい生活の中で子供達に最高の教育を受けさせる事を自分の人生の使命としていた。好きな晩酌を減らして長男を慶応に、次男を早稲田に、長女を府立第二高女に通わせていた。

知らせを受けて祖父は大変な喜びようで、役所の中で息子が特待生になったと聴いて歩いたそうだ。父は、一年浪人して入学したので当然の事と思っていたようだが、その時の祖父の喜びようが一生忘れられないと書き残している。しかし理工学部が一番になったことで、やや高慢になり、その後は山本研一氏(燃料研究室山研の創始者、山本明夫応化名誉教授のご尊父)に先を越され卒業まで追い抜けなかった。卒業の際、学校に残った山本氏に僕は実業界で頑張るから、君は学者としてしっかりやってくれ！学者は、金が目当てじゃ駄目だ。金稼ぎは僕等がやるから、何か大きなことを遣ってくれと激励したそうだ。

父は、死の12年前77歳の誕生日の日に、息子達への遺言状を書き、応用化学科の研究資金として相応の寄付をするよう言い残した。此れを受けて1987年に遺族一同で水野敏行奨学金制度を設立した。その後18年間でおおよそ150人の奨学金受賞者を輩出し、彼等は現在学界、経済界で夫々活躍している。卒業後半世紀を経て、山本先生との約束を果たした事になった。

父は、早稲田に思いを馳せて、現役のころから時間を割いては大学に赴き、OB会の設立(理工学部卒業生の会、六花会)応化卒業生の交流会(三日会)の主催等を積極的に行っていた。

当時就職して間もない私に、その必要性を繰り返し言っていた事を思い出す。

技術屋は世界が狭く、社交性に欠ける。自分で努力して交流の巾を拡げる事が大切だ。その努力は、必ず自分の将来にも繋がる

先日、百目鬼先輩(新制第一回卒)と夕食をご一緒した際、今でも大切にしていますと言われて父の手紙を持ってこられた。父の手伝いで百目鬼先輩が応化会の世話役を遣っておられた頃に父が書いた礼状だった。30年もの間、この手紙を大切に保存されていた百目鬼先輩の気持ちと父の応化会に対する思い入れに触れて涙が止まらなかった。

私は、商社にあってエネルギー事業に43年間従事し、中近東、米国、中国等での海外駐在を含め東奔西走し、世界60数カ国を訪問した。その末期には米国での刑事、民事裁判にも係り、日本企業では例の無い陪審員裁判で司法省と最後まで戦った。日本でもその延長線上での会社代表訴訟を戦い抜いて、漸く任を終え平和な生活になった。

こんな時になって、山崎豊子女史の言葉を思い出すと同時に、父のDNAが、「お前は今まで何を遣ってきたのだ。そして今何を遣ろうとしているのか」と問いかけてきた。思えば父が遺言状を書いた年齢に自分も近づいて来た所為なのだろうか。

母校早稲田とは、我々にとって何なのだろうか。

稲門会と称して、ゴルフや宴会の仲良しクラブを結成し、酒を飲んで校歌を歌う。野球の早慶戦に勝ったと喜び、駅伝で選手の姿が見えないと嘆いてはいるが、じゃーどうしようとする訳でもない。多くの稲門会が、そんな無気力な集団に成り果てているのではないだろうか。校歌を歌って早稲田、早稲田を連呼するのも良いが、それは早稲田あつての事。

今は無き海軍兵学校や旧制高等学校の校歌、寮歌のように早稲田の校歌を、懐かしのメロディにしないためにも、今我々一人ひとりが大学

のために何かを遣るべき時にきているのではないだろうか。

生まれ故郷と同じように、早稲田の学歴は、我々の背番号として人間形成の重要な一部を成してきた。何よりも同じ早稲田に学んで生涯の友を得た。

母校の否定は、自分の人格を否定する事に繋がる。母校への貢献は、自らの人格の向上を図る事に繋がる。個々人が、学術研究や文化的功労、社会貢献等によって功績を挙げ、稲門の名声を上げることは、大学への無形の貢献には違いない。しかし、それだけでは、大学が昨今の激しい社会環境の変化に対応して、生存競争に勝ち残ることは難しく、早稲田と言えどもその例外ではない。

この一年半、応化会の活性化、とりわけ募金運動に精力を注入してきた。大変多くの方々のご支援を頂き感謝に耐えない。しかし未だ卒業生の5%にも満たない諸兄からの協力を得ただけで、実社会で活躍したあるいは活躍している諸兄の多くからは、未だご理解が得られていない。我々の努力次第で更なる協力が得られる筈である。40数年間の不毛であった人生を補い、此れまで多くの人達に支えられ、助けられて来たことへの報恩の思いを込めて、この運動を粘り強く続けるつもりだ。

募金もボランティア活動も誰かが遣ってくれるだろうと無関心を装わないで欲しい。募金はその多い少ないを問われるものではなく、協力の程度は、夫々の都合に合わせればよい。

肝心な事は、早稲田を思い、後輩に思いを馳せる事が、必ずや皆さんの人生の拡がりに繋がる事をご理解頂きたい。無関心、無気力、無行動から一歩踏み出して、自らの精神の活性化を図って頂きたい。

現役諸兄よ!

忙しさに紛れて、人への思いを忘れ、自らの人生を不毛にするなかれ!

トピックス I

第2回フォーラム講演会 イノベーションと国際競争力

——なぜ、日本は経済大国になれたのか、そしてこれからは？——

原 陽一郎

本稿は筆者が早稲田応化会フォーラム講演会（7月8日、大久保キャンパス）で行った講演の概要である。内容は日本機械工業連合会や経済産業省、科学技術庁（旧）などから（株）東レ経営研究所が委託を受けて筆者が中心となっていた一連の調査研究に基づいている。



1. 日本の製造業は円高トレンドの中で世界市場に飛躍した

日本経済が経済大国と云われるまでに発展できたのは、膨大な貿易黒字を稼ぎ続ける製造業のお陰であったことは明らかである。

ところが、日本の製造業が世界市場での存在感を増していった時期、1970年代から90年代の終わりのころまでは円高トレンドが続く期間であった。ニクソン・ショックが起こったのが71年。その後の25年間、円が上昇の勢いを続けた時期は6回あり、これら上昇期は通算すると25年の7割方を占め、円レートは3倍強に高騰したのである。

なぜ、円高トレンドが続いたのか。その原因が日本の膨大な貿易黒字とアメリカの膨大な貿易赤字にあると考えられていたが、貿易の不均衡が生じた理由には二つの見方があった。一つは日米間の経済ファンダメンタルズ（経済成長率、インフレ率、貯蓄率など）の違い、もう一つが国際競争力の日米の格差。ただし、国際競争

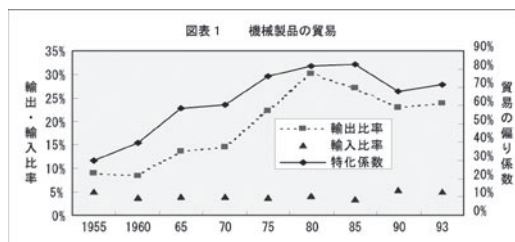
（応用化学科32年卒・新7回 長岡大学学長）

力の格差論は少数派で正統派エコノミストからはバカにされていたのである。

円高トレンドは日本の製造業にとっては不利が進むことである。事実、5回あった急激な円高進行期には、必ずといって良いほど、メーカーは悲鳴をあげ、日本経済沈没論が叫ばれたものだった。こんなに長い間、交易条件の悪化を経験した国は他にない。

しかし、貿易収支の黒字は70年代はGDP対比0～1%であったものが80年代以降は2%前後の水準に上がってしまった。経済の理論に反する現象が起こっていたのである。もちろん、経済理論から予想されるとおりの現象が起こった製品分野もある。その代表が繊維製品。輸出大国から見事に輸入大国に転落した。

打ち続く円高トレンドの中で、貿易黒字を稼いでいたのが機械産業（一般機械、輸送機械、電気機械、精密機械）であった。70年代に輸出比率を伸ばす一方で輸入を抑え込んで、貿易の偏り係数（国際競争力を測る代表的指標）を大きく上げた。



貿易の偏り係数 = (輸出 - 輸入) / (輸出 + 輸入)

その結果、日本の製造業の構造は30年間で大きく変わった。機械工業は拡大し、化学工業、プラスチックも比重を上げた。

2. 機械工業は高度化で国際競争力を高めた

機械製品の輸出が増加した理由は紛れもなく強い国際競争力にあった。機械工業の関係者は、70年代の初めには「生産の競争力」で、70

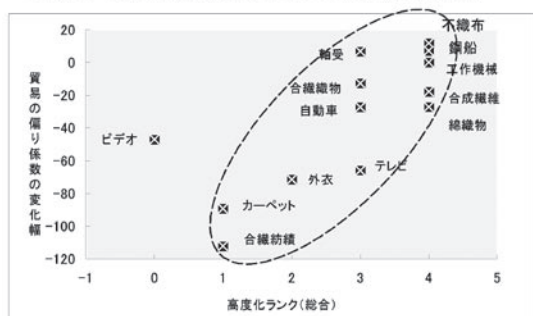
年代の終わりごろには「新製品開発の競争力」で欧米の水準を超えたと評価している。

1990年代の機械業界は、「生産の競争力」では、コストを除く非価格要素（品質、納期、サービス、柔軟性）で欧米に格差を付け、アジアN I E Sに対してはコストの高さを非価格要素の圧倒的な優位で補って、どの地域の産業に対しても総合的な優位性を確保しているという認識であった。「新製品開発の競争力」では、欧米に対して新規性・独創性でやや劣るとしても、他の要素（商品企画力、商品競争力、開発期間、開発コスト）でいずれも優位、したがって総合的に優位を保ち、アジアN I E Sに対しては開発コストを除く他の要素すべてで圧倒的に優位という認識であった。

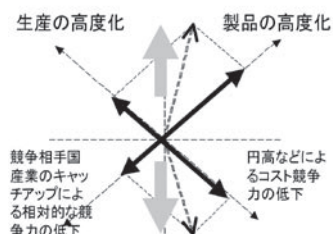
すなわち、日本の機械産業は既存製品については非価格競争力で優位に立ち、その上に新製品の開発でリードして、その総合力で円高トレンドに打ち勝って世界に市場を拡大していったのである。

国際競争力は貿易の偏り係数（国内市場での自国製品と外国製品のシェア）で測ることができる。機械製品には、偏り係数が70%以上の製品が実に多い。一方で、繊維製品には、偏り係数がマイナス70%以下が多い。製造業は円高トレンドに立ち向かうために、「生産の競争力」を向上する「生産の高度化」と新製品開発の競争力」を活かした「製品の高度化」に経営努力を傾注してきた。そのような高度化の成果が貿易の偏り係数にどのような影響を与えたのか。機械製品と繊維製品について、1985年から1995年の10年間に生産の高度化と製品の高度化の進み具合を工業統計等に基づいてランク付けして、その間の偏り係数の変化と対応させてみた。

図表2 総合的な高度化ランクと偏り係数の変化



図表3 国際競争の綱引き構造



この間は激しい円高期（為替レートは85年：238円／ドル、95年：94円／ドル）であったが、高度化ランクが高いほど、すなわち、生産の高度化あるいは製品の高度化の成果が大きい製品分野ほど、輸出、輸入の両面で円高の影響を受けていないことが分かる。国際競争力を維持してきた業種は円高による競争条件の悪化を高度化の努力で克服してきたのである。

3.高度化のイノベーションで世界市場を席巻

イノベーションは「産業高度化のイノベーション」と「新産業創造のイノベーション」に分けることができる。高度化とは、市場の進化、ニーズの高度化に対応するために、より高度な洗練された製品や生産技術を創造していくものである。既存企業が行うイノベーションの多くはこれである。新産業創造型は、まったく新しい市場を開発していくもので、パソコンはその代表。これはベンチャー企業に多い。

日本の製造業が世界に先駆けて挑戦し、成功させて、世界市場で競争優位を確立するに至った高度化の事例（筆者らが調査したもの）を図表5に挙げた。「産業高度化のイノベーション」は市場の進化という観点では連続的であるが、製品コンセプトや技術の上で、革新的で非連続的なものも少なくはない。

図表4 日本の製造業の高度化のイノベーションの事例

技術	市場	顧客応応型	コンセプト提案・市場開拓型
改良・改善型		ベアリング(生産) 自動車部品(生産) 造船(生産)	テレビ(製品) 合繊織物(製品) 「新合繊」
技術体系革新型		自動車(生産) テレビ(生産) 複写機・プリンター(製品) デジタル素材(製品)	「NC工作機械」 「クォーツ腕時計」 「ジェット織機」 「液晶表示デバイス」 「炭素繊維」

註)「」内はその製品市場で新しいカテゴリを作り出したもの。

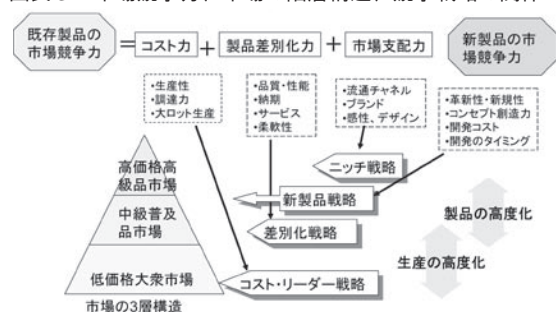
() 内、生産は生産の高度化、製品は製品の高度化

4.日本のメーカーは中級普及品市場をターゲットにした

製品の市場は多くの場合、3つの階層的なカテゴリーに分けられる。市場競争はそのカテゴリー内で展開され、カテゴリー間で競争は起こらないとされる。M・ポーターの競争戦略の3つのタイプは、市場の3つの階層的カテゴリーに対応していると考えられる。

日本の製造業は円高トレンドの中でコスト・リーダー戦略を捨てて、世界の中級普及品市場をターゲットに差別化戦略に重点を置いてきたと見なせる。新製品開発は差別化を強化するために不可欠の条件だったのである。積極的で挑戦的な新製品開発によって、中級普及品市場で圧倒的な競争力を発揮し、他の国のメーカーを駆逐していった製品分野は機械製品には大変に多い。

図表5 市場競争力、市場の階層構造、競争戦略の関係



アメリカはコストリーダー戦略志向が強いようで、差別化戦略、新製品戦略はあまり得意としないようである。ヨーロッパには、ニッチ戦略に強い企業が多い。

5.日本は産業高度化型のハードで世界のイノベーションをリード

日本の製造業はイノベーションによって国際競争力を高めてきた。日本はプロダクト・イノベーションに弱いと言われていたが、実際には、欧米に対比してプロダクト・イノベーションは数の上で欧米を凌駕してきたと考えられる。しかも、産業高度化型ばかりでなく、新産業創造型も多かったのである。

その一方で、日本の活発なイノベーションはハード（製品）に偏り、ソフト・サービスは極めて少なく、さらに、ベンチャー企業発も極度に少ない。一般にベンチャー企業が挑戦する新

産業創造型イノベーションを日本では既存企業が担ってきたという点にも特徴がある。

イノベーションは専門家と経営資源の結集を必要とする。そのための共同作業の場をイノベーション・プラットフォームと呼ぶ。日本のメーカーにイノベーションの成功例が多いのは、企業の中に作られているプラット、つまり開発マネジメントが優れていたためである。一方で、ベンチャー企業型のイノベーションが起こり難いのは、個人の起業家を助ける社会システムとしてのイノベーション・プラットフォームの機能が驚くほど弱いからである。このことは欧米との対比で検証済みである。

図表7 日本発と欧米発のイノベーション事例

タイプ	特徴	動機と狙い	事例(1970年以降、世界的に生活や産業にインパクトの大きかったもの) ()内は生産技術、< >内はデバイス、材料
産業高度化型	・市場の進化に対応する産業の高度化 ・技術、市場の過去の蓄積の活用	企業の高成長維持と競争力の確保 …危機意識	日本発(最初の事業化) 欧米発 ハード: クォーツウォッチ、NC工作機、 AECカメラ、レンズ付きフィルム、D VD、新食糧、デジタル・HDレ ビ、薄型テレビ、<液晶表示、C GD、半導体レーザー、ポリアセ タレン、光触媒製品> ソフト: [カンパニ方式] デジタルカメラ、衛星通信、衛星放 送、移動体通信、台湾半導体ビジネ ス、ATM、NASDAQ、GAD、CG、G P3
新産業創造型	・潜在ニーズの発掘による新産業の創造 ・ニッチ市場から	自己実現意欲、創業 者利己の追求…夢	ハード: カップ麺、ヘッドフォンステレオ、 ワープロ、ホームビデオカメラ、 ホームVTR、カラオケ、ファミコン、 ペットロボット、<皮革繊維> ソフト: 宅電便、iモード 人工衛星、人工腎臓、義肢関節、MP 3、テレビゲーム機、パソコン、 金融デリバティブ、コンビニ、パソコン ソフト、ベンチャーキャピタル、ネットビ ジネス、グノムビジネス、カーナビ、デ ジカカード、IPad (通信工学、インターネット、EMS)

6.21世紀、日本の課題は

日本のイノベーションが既存企業に強く依存し、しかも製造業中心のハードに大きく偏っていた。このことが、これまでの日本の経済発展を支える原動力であった。しかし、これからの時代はその特徴が弱くなる。

日本は90年代に入り、一転して経済成長は低迷を続けている。90年代の日本の経済成長率はOECD加盟30カ国の中で、最低水準だったのである。80年代との格差は極めて大きく、国際比較の観点では、日本経済は優等生から一転してオチコボレになったのである。この背景には、日本人の生活価値観の激変がある。人々はモノの豊かさから心の豊かさを求めるようになり、品物よりもより質の高いサービスを求めるようになってきた。家計消費では、製品・財が伸びず、サービスへの支出の伸びが大きくなった。一方で、開業率は激減した。価値観の変化に対応するためのベンチャー企業のイノベーションが沈滞化していたのである。

OECDは工業生産を基盤とする経済から知

識の生産、流通、利用を基盤とする経済へと構造を変えつつあると分析している。経済の重心は財からサービスへと移る。OECDは「経済成長が知識の生産、流通伝播、利用を基礎とするイノベーションに従来よりもはるかに強く依存するようになる」と述べている。

イノベーションはシュンペーターが見抜いたように経済発展の原動力。社会の進歩、国の豊かさ、人々の豊かさの増進、企業の成功はすべて活発なイノベーションに支えられる。そして、イノベーションは人の究極の欲求 自己実現の一つの対象でもある。そして、到来しつつある知識社会、情報社会では、ソフト、サービス、ビジネス・モデルに関するイノベーションが重要性を増す。日本においても、サービス、

ソフト、コンテンツあるいはビジネス・モデルといわれる領域でイノベーションがもっと活発化しなければならない。

日本の社会の大きな課題はイノベーション・プラットフォームを含む国レベルのイノベーション・システムを新しい時代に適合するように、すなわち、ベンチャー企業が興りやすく、サービス、ソフト、コンテンツ、ビジネスモデルのイノベーションが起りやすいように構造改革を行うことである。まず、ベンチャー企業を支援するプラットフォーム機能を整えるとともに、社会の流動性と透明性を高めなければならない。次にサービス部門での規制緩和を徹底するとともにサービス部門の人材を育成することである。



月ヶ瀬梅溪の溪谷をバックにした梅の花 森啓(修16)
奈良県月ヶ瀬村(平成16年3月14日撮影)

トピックス Ⅱ

「スペイン歴史の旅」

西川 和子



早稲田の修士を1年で中退して31年が経つ。今、特許庁で審判の仕事をしつつ、フルート吹きとして、ギタリストと「F & G」という名のDUOを組み、演奏活動をしている。またスペイン歴史物の執筆を続け、この5月に4冊目の単行本が刊行された。この特許・フルート・スペイン史という、互いに関係のないジャンルを行き来しつつ、何とかやりくりして暮らしている。楽しいけれども、ものすごく忙しい。

今回のこの原稿は、どうやらスペイン歴史物書きとして依頼されたようである。であるなら、随所にスペインの文化・歴史などを散りばめながら書いてみようかと思う。

1. どうして、スペイン？

人は40歳も越えると、なかなか胸などときめかない。枯れてくる。それが実にいい。しかし私は、スペイン語を見聞きしたとき、胸ときめいてしまった。どうして疑問符が逆さ向いて文頭にあるのだろう、このコロコロ転がるような音の連続は何と快いのだろう。話したい、読みたい、理解したい。その思いでスペイン語の勉強を始めてしまったのである。

人は笑った。40歳で新しい語学なんてできる訳がない、と。ところが夫だけはちょっと変わっていて、私が何か始めようとする、面白い

じゃないか、やってみろよ、と必ず言う。これに勇気を得てとにかくできることを片っ端からやってみた。昼休みに近場の語学学校に通い、片道1時間半もかかる通勤電車の中を目一杯学習に利用し、そして2年後、初めてのスペイン旅行をしたのである。

2. プラド美術館の肖像画たち

スペインの首都マドリッドにあるプラド美術館、今までに何回通っただろうか。優に10回を超えるだろう。その最初の出会いは、カルロス何世とかフェリペ何世とか、イサベルとかマリアとか、同じような名前の同じような顔をした多くの肖像画であった。

この肖像画の主たちは、いったい誰たちなのだろう。互いに関係があるのだろうか。このとき初めて私は絵と歴史をつなぐ薄い本を買って帰った。10行ほどの文章を読むのに辞書を引き引き2時間くらいかかる。気の遠くなるような話である。

スペイン語はロマンス語系の古い言語であり、主語が6種類あってそれに応じて動詞の活用も変わり、最大90通りくらいになる。だから、辞書をひけるだけでもかなり立派なことなのだ。

絵の中の人物が誰であるかを調べつつ、スペインの歴史も私の生活に入り込んできた。

3. 歴史をざっと眺めると

さわりだけ、簡単に紹介をすると。その昔はローマの支配だったのだが、私のスペイン史で一番古いところは、西暦711年、ジブラルタル海峡を越えてやってきたイスラム侵入である。イスラム教徒たちはわずか7年ほどでイベリア半島のかんりの部分を支配し、これをキリスト教徒が押し戻したのがレコンキスタ（国土回復運動）であり、その総まとめをしたのが、イサベル女王、西暦1492年のことである。だからイベリア半島は800年近くイスラムが支配し、キリスト教国となって、まだ700年あまり、とい

(昭和48年応用化学科卒・新23回
昭和49年修士課程中退、現特許庁審判長)

うことになる。

さてさて、西暦1500年を過ぎると、スペインにハプスブルク家が入る。この時代、スペインは文化が花開き、画家エル・グレコ、巨匠ベラスケスらが活躍し、名画「ラス・メニーナス」が誕生した。そして全世界を支配し「日没なき帝国」と呼ばれたのである。

しかし、200年後には王位継承者がいなくなり、西暦1700年の頃、フランスから来たブルボン家の支配となる。ここで活躍したのがあの精力的な画家ゴヤ、「着衣のマハ」や「裸のマハ」を描いた人物である。

私は、ハプスブルクがスペインに入る直前の西暦1450年頃から、ブルボン家の中頃、1800年くらいまでを描いているが、最近の執筆依頼や講演依頼をみると、どうやらハプスブルク・スペインの担当のようである。



4. どんな旅を？

最初のツアーに参加したとき、旅慣れた参加者たちは、次はどの国に行きましょうか、などと話し合っていた。しかし、私は密かに、次はスペインのどこに行こう、と考えていた。

スペインの中央部にトルデシーヤスという古い町がある。イサベル女王の娘でファナという女王が46年も幽閉されていた場所である。ここに行きたい、ファナが呼吸していた空気を感じてみたい。

この近くにメディーナ・デル・カンポという中央広場が味わい深い町があり、モタ城という城が現存している。イサベル女王と娘ファナが葛藤し、ファナが狂気を発したというモタ城、見たい、入ってみたい。どんな思いで母と娘は互いに心を閉ざしたのだろう。

また、マドリッド近郊のアルカラ・デ・エナ

レスという町には、スペイン黄金時代の王様フェリペ2世が、息子と弟と甥を同時に通わせた大学がある。正常でなく生まれた息子に少しでも良い環境を与えたい、という親心であった。

こんな風に歴史を訪ねて歩く。誰もつき合ってくれないから、もちろん一人旅である。一人で歴史を求めて歩くから、応対してくれたスペイン人はとても歓迎してくれる。歴史の話や人物の話になると、毎日そういう本をスペイン語で読んでいるから、自分でも驚くほど言葉が出てくる。それにたいしてはスペイン人より私の方が知識がある。

ところで昨年、「女王ファナ」というスペイン映画が公開されたが、この映画の字幕翻訳の監修をした。古い言葉だが、「銀幕」に自分の名前を見たときは、柄にもなく感激してしまった。しかしこの映画の中のファナは、私のイメージしているファナとは少し違う。私のファナはもっと精神的に生きているからである。

5. 融合

以前、ある大先輩が私に話してくれた。60歳を越えると、それまで自分のしてきたことが融合されていく、とても面白いことである、と。

まだその域には達しないが、最近、自分のコンサートで歴史の話をすることが増えてきた。聴いてくれる人たちは、私の歴史話は説得力があるという。嬉しいことである。今年1月の、あるスペイン関係の新年会のコンサートでは、スペインの代表的作曲家であるグラナドスの曲をプログラムに挙げた。こんなことも、先輩の言葉にある融合かもしれない、ふとそう思う。

今年も実はスペインに行ってきた。だんだん行く場所が辺鄙なところになり、バリャドリッドというかつての首都に宿泊しつつ、人口400人ほどの小さな村にタクシーで往復した。この旅の話もいずれ私の本に登場するだろう。

ちなみに今年5月に出版されたのは、「スペインフェリペ二世の生涯?慎重王とヨーロッパ王家の王女たち?」(彩流社刊)というものです。是非、お手にとってみてください。

ひとりで執筆しているように書いているが、私のパソコンまわりや、資料のファイリング術、また講演時のプロジェクターの調整など、ネック部分は夫が引き受けてくれている。夫にだけは頭があがらない日々である。

平田彰先生のご退任に伴う記念行事の報告

常田 聡
(応用化学科助教授)



平田彰先生は昨年9月19日にめでたく古希を迎えられ、本年3月末をもって早稲田大学をご退任されました。ご退任に伴う記念行事として、去る3月12日に国際セミナー、最終講義および記念パーティーが開催されました。

国際セミナーは、海外から7名のゲストをお迎えして、大隈講堂にて開催されました。セミナーのタイトルは「人類の幸せのための化学に関する工学とその基礎」で、平田先生が取り組んでこられた研究を総括するのにふさわしいタイトルでした。7名の外国人ゲストはどなたも平田先生と親交の深い研究者ばかりでしたが、その専門分野は多岐にわたっており、平田先生が取り組んでこられた研究分野の広さをうかがわせるものでした。国際セミナーの主催は早稲田大学理工学総合研究センターにお願いし、また21世紀COE実践的ナノ化学教育研究拠点にも共催をお願いいたしました。濱義昌先生（早稲田大学理工学総合研究センター・所長）および竜田邦明先生（早稲田大学理工学術院・副学術院長）のご挨拶に始まり、朝9時から夕方18時近くまでの長時間にわたるセミナーでしたが、大隈講堂には平田先生とゆかりの深い大勢の方にお越しいただきました。7名の外国人ゲストのお名前・ご所属およびご講演タイトル以下に示します。

1. "Particle Classification by Liquid Fluidization" N. Epstein (Honorary Professor, Department of Chemical and Biological Engineering, The University of British Columbia)
2. "Fused Chemical Reactions: From The Pharmacokinetics of Acute Toxicology to Wax Removal in Sub-sea Oil Pipelines" H.S. Fogler (Vennema Distinguished Professor, Department of Chemical Engineering, The University of Michigan)
3. "Quantification of Flow Patterns and Mixing in Multiphase Reactors" M.P. Dudukovic (The Laura and William Jens Professor, Chairman of Chemical Engineering Department, Director of Chemical Reaction Engineering Laboratory, Washington University in St. Louis)
4. "Developments in Grinding Technology" O. Trass (Professor Emeritus, Department of Chemical Engineering and Applied Chemistry, University of Toronto)
5. "Deposit Formation in Heat Exchangers and Processing Equipment" P.A. Watkinson (Professor Emeritus, Department of Chemical and Biological Engineering, The University of British Columbia)
6. "Recent Developments in Crystal Growth from the Liquid Phase" S. Dost (Professor and Canada Research Chair in Semiconductor Crystal Growth, Crystal Growth Laboratory, University of Victoria)
7. "Thermocapillary Effect in Microgravity Environment" W.R. Hu (Professor and Academician, Institute of Mechanics, Director of National Microgravity Laboratory, Chinese Academy of Sciences)

7名の外国人ゲストのご講演が終わり、8番目の講演者として平田先生が演壇に立たれました。そして、最終講義「異相接触操作における移動現象—スペースシャトル実験から産業廃水の浄化まで—」が始まりました。平田先生はこれまでのご自身のご研究について、転機となった実験データやアイデア、あるいは人との出会いやそのエピソードに触れながら、たいへん丁寧に講義してくださいました。ひとつひとつの研究、そしてひとりひとりの門下生を先生がいかに大切にされていたかをあらためて実感させるご講義でした。この最終講義には、平田先生の門下生だけでなく、多くの教職員の方々も出席されていて、先生の心温まる講義に魅了されていました。そして、最終講義終了後の拍手がいつまでも鳴りやまなかったことがとても印象的でした。

国際セミナーと最終講義が終了した後、場所をリーガロイヤルホテル東京のロイヤルホールに移し、平田先生退職記念パーティーが開催されました。このパーティーの企画にあたっては、平田研究室だけでなく化学工学部門各研究室の同門会から多大なお力添えをいただきました。実を申しますと、パーティーの名称は「古希を祝う会」にしたかったのですが、最終的に平田先生ご自身の強いご希望により「退職記念パーティー」となりました。「早稲田大学の助手になって以来42年間も勤め上げることができたのはとてもめでたいことだから」という理由によるものでした。先生の飾らないお人柄がうかがえるご意見でした。

パーティーは早稲田大学総長の白井克彦先生および早稲田大学理工学術院長の足立恒雄先生からのご祝辞に始まり、海外からのゲストを代表してNorman Epstein先生からお言葉を頂戴しました。Epstein先生は90歳近いご高齢にもかかわらず、この日のためにわざわざカナダから駆けつけてくださいました。つづいて、早大化工会を代表して本田尚士氏（創造工学研究所所長）にご祝辞ならびに乾杯のご発声をいただきました。

パーティーには500名近くの方にお集まりいただきましたが、歓談の時間中に平田先生は、参加してくださった方全員にご挨拶なさるためフロアを順番に回っていらっしゃいました。どこにどなたがいらっしゃるかということがす

ぐにわかるように、あらかじめテーブルを分けたことも平田先生からのリクエストによるものでした。

歓談後、門下生代表の岡野泰則氏（静岡大学）、および発起人代表の酒井清孝先生からご挨拶をいただきました。また、記念会に対して皆様より多大なご寄付をいただきましたので、私が発起人幹事を代表して先生に記念品を贈呈させていただきました。つづいて平田先生および奥様よりたいへん心温まるご挨拶をいただきました。そして最後に、記念会実行委員を代表して関谷紘一氏（昭和電工（株））に閉会のご挨拶をいただき、お開きとなりました。パーティーの司会は平田研究室門下生の波多野吾紅様（（株）東芝）にお願いしました。経験豊富な波多野様の名司会ぶりに参加者の皆様からは賞賛の声があがっていました。

今回の記念行事を通じてあらゆる面で平田先生のスケールの大きさにあらためて感銘を受けた次第です。平田先生の益々のご健勝とご活躍をお祈りするとともに、記念行事にお力添えいただきました皆様に深く感謝申し上げます。

ご退任後の平田先生のご様子を付記させていただきます。平田先生は永年にわたる教育、研究活動における在任中の多大な業績が高く評価され、早稲田大学名誉教授の称号をお受けになられ、また大学の発展に多大の貢献をされた方に贈られる早稲田大学名誉賛助員の名称を贈られました。さらに、平田先生は大学に多大な寄付をされ、博士課程に進学する学生を対象にした平田奨学金を設立されました。そして現在、早稲田大学理工学総合研究センターの顧問研究員として、引き続きご指導をいただいております。



平田彰先生 1934年9月19日生

略歴：

1941年	4月	福島県会津若松市立行仁国民学校	入学
1947年	3月	同上 行仁小学校	卒業
	4月	同上 第3中学校	入学
1950年	3月	同上	卒業
	4月	福島県立会津高校	入学
1953年	3月	同上	卒業
	4月	早稲田大学第一理工学部数学科	入学
1954年	4月	同上 応用化学科	転科
1958年	3月	同上	卒業
1960年	3月	同大 大学院理工学研究科応用化学専攻	修士課程 修了
1963年	3月	同上	博士課程 修了

工学博士 授与

	4月	早稲田大学理工学部応用化学科	助手
1966年	4月	同上	専任講師
1968年	4月	同上	助教授
1973年	4月	同上	教授 現在に至る
1990年	7月～1995年11月	早稲田大学 環境保全センター	所長（兼務）
この間			
1970年	6月～1972年3月	カナダ・トロント大学	博士研究員
1976年	7月～1976年12月	カナダ・ブリティッシュコロンビア大学	客員教授

受賞：

1973年	4月	(社) 化学工学協会・論文賞
1996年	4月	(社) 化学工学会・学会賞
1997年	5月	(社) 石油学会・学会賞
1999年	4月	私立大学環境保全協議会・功績賞
2001年	4月	(社) 日本生物工学会・論文賞
2001年	10月	早稲田大学大隈記念学術褒章
2002年	4月	日本水処理生物学会・論文賞

主な学外活動：

1983年～1987年	(社) 化学工学会	庶務理事
1987年～1989年	同上	研究委員会 委員長
1989年～1991年	同上	英文誌編集委員会 委員長
1991年～1993年	同上	研究部門委員会 企画運営委員長
1993年～1995年	同上	国際交流部門委員会 委員長
1997年	同上	副会長
2001年	同上	名誉会員
1982年～1985年	(社) 石油学会	経営科学部会長
1985年～1996年	同上	理事
1990年～1993年	同上	会計理事
1993年～1996年	同上	財務委員長

1996年～1999年	同上	副会長
1999年～2002年	同上	監事
2002年	同上	顧問
1993年～1997年	大学等環境安全協議会	理事
1997年～現在	同上	評議員

1990年～1995年	私立大学環境保全協議会	理事
1995年～1996年	同上	会長
1996年～現在	同上	顧問

1996年～2000年	(社) 日本工学アカデミー	理事
-------------	---------------	----

1987年～1989年	文部省 学術審議会	専門委員
-------------	-----------	------

1995年～1997年	日本学術振興会 特別研究員等審査会	専門委員
-------------	-------------------	------

2000年～現在	(財) 有機質資源再生センター	理事長
----------	-----------------	-----

1991年～1994年	宇宙開発事業団	客員開発部員
-------------	---------	--------

1995年～現在	(独) 国立環境研究所	客員研究員
----------	-------------	-------

その他, 東北大学, 名古屋大学, 東京農工大学, 東京理科大学などの非常勤講師 歴任

私の職場である国立循環器病センターについて紹介させていただきます。循環器は、主として血管と心臓から構成され、これら循環器に関わる疾患を総称して「循環器病」と呼んでいますが、例えば、心筋梗塞、高血圧症、大動脈瘤、脳卒中などが主要な疾患として含まれます。当センターは、その名の通り「循環器疾患の究明と制圧」を目的とした、我が国唯一の専門施設で、昭和52年6月にがんセンターに次ぐ厚生省の高度専門医療ナショナルセンターとして、大阪北部の北千里の地に創設され、病院と研究所が一体となって最先端の診療と研究に取り組んでいます。

当病院は、心臓移植の施設としても指定されていることから、実際にもたびたび心臓移植が実施されており、これらのことはニュースなどで周知のことと思います。

一方、私の所属している研究所は約20の部（大学等での研究室に相当する組織）から構成され、「循環器病制圧」に向けた研究に日夜取り組んでいます。

今回は、紙面の関係上、私の所属する研究所についてのみ紹介させていただきますが、病院・その他の詳細な内容はweb site (<http://www.ncvc.go.jp/>) を参考にして下さい。

さて、現在、研究所においては、基礎研究から臨床応用研究として、遺伝子解析研究、タンパク質化学研究、人工臓器・材料の開発、再生医療、バイオニック医学研究などを、生化学・生理学・工学的側面から実施しています。

各部の一般的なメンバーは、常勤職員として、部長（大学等での教授クラス）1名を筆頭に、室長（同助教授・講師クラス）数名、室員（同助手クラス）数名に加え、非常勤職員としてポスドクやテクニシャン、秘書などです。特に、大学との違いは、教育業務（講義・実習等）がないので、ほぼ研究業務に専念できるという有利な点がある一方、基本的には学部学生や大学院生がいないので、マンパワーが不足しがちで、それを補うためにテクニシャン等を活用して、実験を円滑に進めなければならない

ことが、不利な点であると言えるでしょう。

私の属する生化学部は、寒川賢治部長（本年度より研究所副所長）のもと、私を含む室長3名、室員2名の常勤研究員に加え、7名のポスドク等の特別研究員、5名のテクニシャン、2名の秘書の総勢20名で構成されています。

ここからは、具体的な研究内容について、私の研究経歴に沿って紹介したいと思います。

私は、応用化学科鈴木晴男研究室を学部卒業後、企業研究所において、有機化学的手法を基にした生化学的開発研究に4年間従事しました。その過程の中で、更なる真理探究への想いを深めるようになり、高度な知識習得と経験の集積を目指し、宮崎医科大学第二生化学教室（当時松尾壽之教授、その後循環器病センター研究所所長）に研究生として入学しました。当時の研究室では、ちょうどその時期に、寒川・松尾両先生らにより、ANP（心房性ナトリウム利尿ペプチド）、BNP（B-型ナトリウム利尿ペプチド）が発見されたところで、私も「ヒトBNPの単離・構造決定」というテーマで研究を開始しました。このように当研究グループでは、「新しい微量生理活性ペプチドの単離・構造決定とその生理作用の解明」が大きな研究テーマであり、以来、私自身もこのテーマを基盤として、現在も研究を継続しています。BNPに関しては、更に病態生化学的研究を進め、心疾患との関連性を明らかにするとともに、ナトリウム利尿ペプチドファミリーの臨床研究に大きく貢献しました。なお現在、ANP、BNPは、心不全治療薬や診断薬として実用化されています。また、同時期に脳、腸組織やがん細胞培養上清等からバイオアッセイ（ヒヨコ直腸弛緩活性等）を検索の指標として、新規生理活性ペプチドの同定、新たな生理活性の解明を行いました。

次に、研究対象をペプチドからタンパク質へと広げ「骨形成を制御する新しいタンパク質の探索」をテーマとし、既に習得した微量ペプチド精製の技術をベースにタンパク質の単離・精製研究に取り組みました。この間に、松尾先生が国立循環器病センターの研究所所長へ、少し時期を遅らせて寒川先生が生化学部長に着任さ

れました。これらの異動に伴って、私も生化学部の室員として採用となり、現在（室長）に至っています。上記のテーマにおいては、骨形成タンパク質BMP-3b（Bone morphogenetic protein-3b）と命名した新しい因子を発見し、本因子の骨形成過程での機能を明らかにしました（この研究にて薬学博士号を取得）。興味深いことに、骨組織に存在しているBMP-3bが、実は脳・神経系の初期発生（頭部形成）に必須のタンパク質であることも解明しました。更には、本因子が心臓・血管系にも存在している結果なども得たことから、現在、再生医療への臨床応用等も視野に入れた循環器系領域での研究を展開しています。

最後になりますが、私の所属する生化学部のテーマ全般を紹介いたします。大きなテーマとしては、上述した「未知の生理活性ペプチドの探索・構造解析」に関する研究を推進していますが、この研究は、どこに、どれだけ、どのような性質かも分らない未知物質を探し当てることなので、成果が出るまでには時間もかかり、地道で根気の要る仕事です。しかし、ひとたび新規物質が発見されると、基礎研究（機能解析やその作用機序等）から応用研究（病態生理学的意義の解明から治療薬開発研究）まで飛躍的に進展させることが出来ます。実際にも、当研究所のみならず、病院部門や他の施設との研究交流を積極的に行っています。

当生化学部が中心となり発見され、現在進行中の研究課題に関わる生理活性ペプチドを列挙します。(1)グレリン；成長ホルモン分泌ペプチドでかつ摂食亢進活性、心機能改善機能を有する。1999年に発見されたペプチドで、寒川先生らは、本研究で2000-2001年の2年間におけるHot Paper（引用が多く注目されている論文）数が世界ランキング第一位との評価を受けました。(2)アドレノメデュリン；降圧作用を示す新しい循環調節ペプチド。(3)ナトリウム利尿ペプチド（ANP, BNP, CNP）；降圧作用、利尿作用等を有する。既に、治療薬として実用化。(4)ニューロメジンU；摂食抑制ペプチド。(5)グアニリンファミリー。(6)PACAP（Pituitary Adenylate Cyclase Activating Polypeptide）。

その他、研究所全体としての活動としては、松尾先生がリーダーとなり1993年からのCOE育成研究（中核的研究拠点、科学技術庁）を、

生化学部をはじめとする研究所内の共同研究で精力的に取り組んだのははじめ、最近では研究所のみならずセンター全体として、大型国家的プロジェクト（ミレニアム・ゲノムプロジェクト、ナノメディシンプロジェクト、メディカルフロンティアプロジェクト等）の課題も遂行しています。また、生化学部関連では、松尾先生がリーダーである「創薬プロテオームファクトリープロジェクト」は、研究協力機関として関わっています。

「職場だより」として書き始めたものの、主観的な紹介になった上に、個人的経歴も含み、異例の内容となってしまうのではないかと危惧しておりますが、少しでも、読者の皆様の参考になる部分があれば嬉しく思います。

ご質問などありましたらご遠慮なく連絡下さい。



jhino@ri.ncvc.go.jp or jnhnj1@yahoo.co.jp

日野 純

国立循環器病センター研究所・生化学部・室長・薬学博士
(昭和59年応用化学科卒・新制34回)

会員のひろば

私の趣味 創作折り紙について

熊坂 浩

神奈川大学名誉教授
(昭和23年工経応用化学科卒・工経12回)



平成8年3月に神奈川大学を定年退職しました。しかし、長年の趣味が高じて、現在も日本折紙協会の常任理事や折り紙作家は続けております。

私は、自分でも数えられないほど沢山の折り紙作品を創作しており、一昨年は文部科学大臣賞を受賞しました。そこで、私の創作折り紙の見方・考え方を述べたさせて頂き、その後に自作折り紙作品の写真を紹介することになります。

まず、創作折り紙の基礎となる見方・考え方ですが、つぎの四つの折り紙特性の観点から私なりの説明をします。

- ①折る対象物の特性 ②折る素材の特性
- ③折りの特性 ④作品の特性

説明が長くなりますが、少しは分かりやすくするための例をあげながら話を進めましょう。

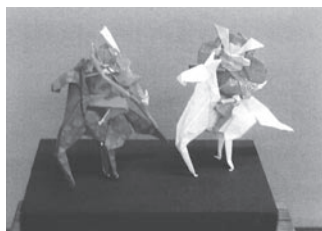
創作折り紙では、まず、①「折る対象物の特性、とくに特徴」をしっかりととらえることが大事です。例えば、鳥の特性なら、くちばし、二つの羽、二本の足、尾などですが、対象物が鶴なら、くちばし、首、足が長く、羽は大きいなどの「特徴」（特性の中で特に目立った点）に着目し、これらの特徴を折り紙らしいスケッチ（鶴の場合は長細さの違う三角を鶴らしくならべた図）にしておくと、作品イメージができ、後述する“基本形”を選ぶのに役立ちます。

つぎに、②④の例として、キリンの場合、黄色い紙（②「折る素材の特性」の一つ）を用い、細長い頭、首、足の特徴をだすように折れば、耳、ツノ、尾などが無くてもキリンになります。このように、特徴を捉らえて簡潔に表現し、その他は余韻として残すことが、“折り紙らしい”美しい作品（④「作品の特性」）を作るポイントになります。

さて、③「折りの特性」とは、折ることによる“形”（構造的特性）と“はたらき”（機能的

特性）を言います。紙は折るごとに形が変わりますが、その形はその次の形を折れる“はたらき”が無いと先へ進めません。そこで、日本折紙協会では、折りたい目的を果たせる折りの特性を持つ基礎折り形（“基本形”）を13種決めていますので、それを活用します。いずれにせよ、創作折り紙では、折るプロセスの中で“形とはたらき”を併せ考えることを習慣づけることが大事です。以上で創作折り紙の話は終わります。

最後に、私の作品紹介ですが、解説は紙面の関係で割愛し、カット写真だけでお許しください。



虫やの話

桜井 博

元三菱商事(株)
(昭和40年応用化学科卒・新制15回)



「虫や」と言っても、昔のスズムシやキリギリス売りではなくまた、最近のカブトムシやクワガタ売りを商いとして
いる人たちの話ではない。

晩秋の信濃路、雑木林の手前に車が停車する。2-3台の車から、トレッキングシューズを履き帽子をかぶり釣り人が着るようなポケットがたくさん付いたベストを着た中年の男たちが出てくる。軍手に庭木の剪定に使う高枝バサミを持ち、中には小型のスコップまで持っている者までいる。何とも異様な光景である。「虫や」の集団だ。ここに応化出身者が3人もいる。虫の採集や飼育が大好きな人間を、仲間では「虫や」と言い、蝶だけの人間を「蝶や」と言う。

この日は信濃路に「ゼフ」と呼んでいるシジミ蝶の仲間の卵を採集に来たのである。ゼフの仲間は日本に20数種類いる。翅が金属光沢に光る南米のモルフォ蝶をご存知の方もいると思うが、この蝶も飛んでいるときはきらきらひかり、飛ぶ宝石のようで仲間の間ではたいへん人気がある。夏の終わりに親が生んだ卵を採集し、来年の春に飼育を楽しむためだ。クヌギ、ミズナラ、コナラ、カシワ、クルミ、ブナ、サクラ等など葉の落ちた枝先を高枝バサミで切り落とし卵を探すのである。木によって蝶の種類が異なることは言うまでもない。採集してきた卵は、これらの木が春に芽吹くまで家の冷蔵庫の野菜箱で春を待つのである。



卵が小さいだけに孵化した幼虫はとても小さい。何種類かを10-20頭（蝶は1頭、2頭と数える）飼うとたいへんである。会社から家に帰ると、女房が「ご飯は?」「お風呂は?」と言っているのを尻目に、与えた植物を幼虫が食べたかどうか、まずルーペで覗き込むのである。女房から「私は見ないのか?」といやみを言われることもしばしばである。

卵の孵化とその飼育、越冬幼虫の飼育、蛹の羽化、春先に出る蝶の採集の為の遠征など2月の



終わってから6月初めまでは忙しい毎日が続く。

私が生まれ育ったのは横浜、物心がついた頃には虫を追いかけていた。小学校の夏休みの宿題はお決まりの昆虫採集、金賞を示す金色の短冊を毎年貼ってもらっていた。自由研究の発表も蟬や蜂で、他の人はなぜ虫に興味を示さないか不思議であった。学生時代は登山などスポーツに打ち込み虫は横目で追っている程度であった。

商社勤めだったのでトルコ共和国のアンカラに転勤となった。最初は3日3晩徹夜するほど忙しかったが、トルコ経済が極端に悪化し時間が出来た。そこで手製のネット（捕虫網）でトルコの蝶を採集し、当時良く頂いた佃煮の箱でつくった展翅板で標本をつくった。標本は当時出来たアンカラの日本人学校に寄付をすることにしていたので、標本の細密画を描いて日本に戻った。

入社が同期の「蝶や」にこれを見せたところ、「虫の会」への入会を強く勧められた。このメンバーはアマチュアだがプロ集団と言っても過言ではないほど熱心で詳しい人達ばかりであった。早口に学名で喋るものだから、最初はさっぱり分らず疎外感すら感じた。

このプロ集団に昭和44年卒、酒井正敏君（三菱マテリアル）と45年卒、大熊邦雄君（現三菱商事ケミカル社長）がいた。虫の会の集まりでは両君には本当に親切にってもらっておりまた酒井君とは2人で南アルプスに遠征もした。いろいろな分野で友人はいるが応化卒と虫を通じての両君とは永い付き合いになるであろう。

ファッション・クリーニング産業のこれから

海野 信

株式会社 白洋舎 取締役
(昭和48年応用化学卒・新制23回)

昨年総合大学の教養課程で350人を対象に「ファッション・クリーニング産業のこれから」というテーマで講師をしました。クリーニングの技術的な話や、業界の経営上のポイントなどを話しましたが、その中でドライクリーニングについて説明したところ、ほとんどの学生はドライクリーニングの具体的な方法を知りませんでした。衣・食・住といわれる必需品である衣類はメンテナンス（クリーニング）をして繰り返し着用します。そのクリーニングが家庭洗濯なら「洗濯機が全自動で色々なコースを選んで行ってくれる。」絹やカシミアなど家庭洗濯で心配なものは「洗濯屋さんに出せばきれいにしてくれる。」というのが現状ですので「どのように洗濯されているのかはまったく分からなかった。」というのが実際でした。

私が勤めている(株)白洋舎は来年創業100周年を迎えます。明治40年には日本で始めてドライクリーニングを商業化しました。昭和9年には業界で初めて研究所を設置し、初代所長には先輩の応化出身の横山鹿之亮が就任し、私が在籍していた研究室の石川教授が横山と応化で同窓だった縁で、私も当社に入社し、研究所で色々な研究をしました。入社する際には私もドライクリーニングが水の代わりに有機溶剤を使用して内胴径が1メートル以上もある大きなドラム型洗濯機で一度に背広を数十着も洗っているのには驚いてしまいました。

研究所を発足させた当時は、衣類を清潔にクリーニングすることは衛生面でとても重要なことで、科学的に衣類を清潔にする技術を社会に普及することが大切との見地で、経験だけの技術から理論的な技術に目を向けて、解明できた理論を広く家庭の主婦に普及する試みを行ってきたそうです。

欧米では昔から洋服を着ていて、そのメンテナンスも主婦の重要な仕事で母親からきちんと教育される伝統がありますが、日本では当時洋服を着る人は一部の人で、戦後になっても大正から昭和初期に生まれた我々の母親世代は着物の生活で育った世代です。和服の仕立てや、と



き洗い張りはできるのですが、当然洋服のメンテナンス知識は洗濯もアイロンがけもほとんどなく、文化服装学院やドレスメーカー女学院が洋服を作る技術の普及を始めたところで、女子大でも昭和24年頃に家政学部がやっとでき始めた時代でした。

このような時代の母から教育を受けた一般的な我々の世代は衣服(洋服)の知識やその取り扱い方法などほとんど分からず、どういうものを自宅で洗って、どういうものをクリーニング屋さんに出すかの明確な基準がなく、高額なものはクリーニング屋さんという考えが一般的です。

既製服には家庭用品品質表示法により取り扱い絵表示の取り付けが義務付けられております。この表示を見ることで家庭洗濯ができるのか、商業クリーニングが必要かを判断される人も多いのですが、表示自体がクリーニングの知識を十分持ち合わせていないアパレルメーカーの人が付けますので消費者のニーズを反映した付け方などになりがちです。

バブル崩壊までは家庭洗濯できるものでもドライクリーニングの表示をつけるものが多くありました。ドライクリーニングの表示をつけるとそれだけで商品の価値が上がったのです。それが、バブル崩壊による低価格化や環境問題により「ドライクリーニングより水洗いのほうが家庭で洗えてメンテナンスにコストがかからない。」「ドライクリーニングに使用する有機溶剤は環境に優しくない。」などの一部先入観によ

り、家庭洗濯は多量の水や洗剤を使用し排水処理をしないで排水してしまうにもかかわらず、自然に優しいというイメージが先行して水洗いの絵表示をつけた製品が多くなってきています。

衣服は主素材と釦や芯地などの副資材で作られています。これらの材料が水洗い（水）とドライクリーニング（有機溶剤）のどちらに影響を受けやすいかで適正なクリーニング方法が決まります。また、付着した汚れの種類によっても水のほうが除去しやすかったり（水溶性汚れ）、有機溶剤のほうが除去しやすかったり（油性汚れ）します。水溶性汚れが多く含まれる汗が付着するスポーツ衣料は水洗いできる材料で作る必要があります。オーバーコートなどに使用する保温性の良い毛製品は土埃やタバコ、排気ガスの煙などが多く付着します。タールのような有機溶剤に溶解しやすい油性汚れと、除去に機械力が必要な不溶性汚れがほとんどですので機械力を加えても衣服材料が膨潤などの形態変化が生じにくいドライクリーニングが適正といえます。

ドライクリーニング業界はバブル崩壊後、総売り上げが平成4年の8,117億円から昨年は4,955億円にまで減少しました。アパレル業界が絵表示に水洗いを多く付けたからではなく、主原因はカジュアル化だと思っています。この減少傾向は先進諸国では世界的な傾向です。外出着という言葉は死語となり、ジーパン姿で出勤する人も少なくありません。ところがCHANELやFENDIなど高級ブランドはかえって売り上げを増しています。衣服業界も2極化が進んでいるといえます。当社でもビジネスウエア（背広）のような衣服は確かに減少しましたが、高級ブランド品やカシミア製品など高級素材のものはバブル崩壊後も増加しているのが現状です。

物質的にキャッチアップした日本はやっと衣服文化でもキャッチアップし始めてTPOで上手に衣服を着るようになったのだと思います。我々の世代は、結婚式といういわゆる冠婚葬祭用のダブルの黒のスーツで白のネクタイしか考えられませんが、平服でのパーティー形式の披露宴が増えてきて何を着ていけばいいか困ってしまうことがあります。ところが今の若者はとても似合った服装をします。

これからのクリーニング産業はファッション

の変化を適切に捉え、それにあったクリーニング方法を提供していく必要があります。アパレルの流れは前述のごとく2極化と、個性を表す多様化がキーワードになります。様々な材料を使った衣服や高級品が商業クリーニングに出されるようになります。

これらに対応するドライクリーニングは特性の異なる有機溶剤を使い分けたり、水洗いでも素材と汚れによって様々な洗い方を工夫する必要があります。当社では研究所で環境への影響が少なく、ポリウレタンなど新しい衣服材料にも剥離や変退色などの影響が出ない溶剤を独自に開発したり、収縮などにより水洗いが困難だった素材の水洗い方法を開発したりして、高級クリーニングの提供を行っています。

また、家庭向けクリーニングだけでなく、コンビニやファミレスのユニホームのクリーニング付きレンタルや、ホテルやレストランのシーツやテーブルクロスのクリーニング付きレンタル業務も売り上げ比率が多くなり、これから成長する業務と考えています。

現在研究所では応化を出て平成9年修士課程を卒業した伊藤芳友君が主要な研究員としてこれらの課題に対する研究開発で活躍しています。



新旧混在 石橋暉彦(新12)
ソール生まれの私が、60年ぶりに訪れた時の印象です。
(平成16年10月撮影)

学生部会

2005年度新入生オリエンテーション

応用化学科3年 米山 依慶

2005年度4月。150名ほどが新たに応用化学科の一員として加わった。新入生ガイダンスのお手伝いに参加させていただいた際、希望を胸に膨らませ、目を輝かせた新入生の姿がそこにあったことは今でも鮮明に覚えている。そのような新入生に大学生生活の「方向付け」をしてあげるのが、オリエンテーションである。

私達学生部会では、今年度のオリエンテーションに向け、1年の担任の小堀先生、桐村先生のご指導・ご鞭撻の下で、例年より早い12月の段階から準備に取り掛かった。常に学生部会全員が新入生にとって有意義であり、どのようにすれば大学生生活のよいスタートを切るためのアドバイスをしてあげられるかということを強く意識して会議に臨んできた。今年度のオリエンテーションは、その結果が反映されたのではないかと思う。

2005年4月22日(金)～23日(土)、軽井沢追分セミナーハウスにて開催された応用化学科新入生オリエンテーションの内容を振り返り、僣越ながら記述させていただきたいと思う。

4月22日(金)。オリエンテーション1日目である。東京は風の強い曇り。少し天気不安を抱えながらも、出欠確認の際特に問題なく、よいスタートを切ることができた。いざバスに乗り、軽井沢に向かって出発した。軽井沢に近づくにつれ天気もよくなり、次の日のスポーツ大会も無事行えるか、ということを考えていたら、あっという間に軽井沢追分セミナーハウスに到着した。東京ではなかなか味わうことのできないおいしい空気ときれいな空には、自身3度目でありながら、新鮮に感じた。そのような、普段とは一味違った軽井沢という場所・環境の下で、オリエンテーションが無事始まった。

今年度のオリエンテーションは例年の反省を活かし、大きく2つの内容を新たに試みた。まず1つ目の新たな試みとして、例年1回しか行っていなかったグループミーティング（以下



GMと略す) 1という、教員・助手の方々と交えた交流・話し合いの場を、大きく2グループに分割して行い、さらにGM1を行う前に新入生同士での話し合いの場を設けた。こうすることで、1グループの人数を減らし、新入生に発言機会を多く与えることを目的とした。新入生同士での話し合いの場では、学生部会はいらないのでは、と感じてしまうくらいに他人の意見を聞きながら、積極的に意見を交わしていた。さらに、GM1が始まったときも大学入学したばかりとは思えぬ程、しっかりした意見・目標をもっており、驚きを感じた。新入生にとってのみならず、学生部会にとっても大変有意義な時間であったと思う。

そして、夕食後は例年通り、各研究室よりご参加下さった、補助学生の方々と学生部会を交え、新入生が充実した学生生活を送れるようなアドバイスをするGM2を行った。ここでも、新入生は積極的に質問をしているように感じた。少し時間を遅らせて開始し新入生に迷惑をかけてしまったものの、こちらも例年同様の盛り上がりを見せ、新入生にとって有意義な時間を提供することができたのではないかと思う。

夜、軽井沢のきれいな星空を眺め、2日目スポーツ大会が行えることを期待し、1日目を終えた。

4月23日(土)。オリエンテーション2日目も、風が少し強いものの雲1つない快晴。まさにスポーツ大会の開催日和となり、無事スポーツ大会を行うことができた。

今年度の2つ目の新たな試みとして、例年通りサッカー・バスケットボール・テニス・卓球・ソフトボールの各種目に加え、スポーツ大会に全体種目として綱引きを開催した。朝9時より5つの中から各希望種目に分かれ、1時間汗を流した後、30分の休憩を挟み綱引きを開催した。初めての試みということもあり、また団体競技ということでスムーズに進行できるであろうか、学生部会一同不安を抱えながらも、そのような不安を一掃するかのように、予想以上の盛り上がりを見せた。新入生が一丸となり1つの種目を成し遂げた、この達成感・協力することの素晴らしさはいつまでも覚えてほしい。その後、昼食を摂り、バスに乗車し、理工学部キャンパスに戻ってきて解散した。

新入生にとって、このオリエンテーションが今後の大学生活に反映されれば、また、学生生活で困ったとき、悩んだときなどは、このオリエンテーションでの先生方や先輩方のアドバイスを思い出してもらえたらと思う。このオリエンテーションでの新鮮な気持ちをいつまでも大切に持ち続け、得た友人や友人の意見を尊重して、勉学に励むとともに豊かな人間性を築き上げて欲しいと願う。同時に、私も学生生活でつまづいたとき、悩んだときは忘れかけてしまった2年前の積極的な気持ち、友人や先生方・先輩方のアドバイスを思い出し、残りの学生生活を充実したものにできるように努めたい、と新入生から学んだような気がする。

思えば2年前、私が新入生としてオリエンテーションに参加した頃、生意気にも「もっとこうすればいいのに」などと思っていたが、自分が代表として仕事に取り組むと、仕事を分担することの難しさなどを知り、先輩方の大変さを改めて痛感し、先輩方に感謝したいと感じた。しかし、大変さよりも充実感、達成感、協力することの大切さなど学んだことの方が遥かに心に残っている。今年度のオリエンテーションに参加できたことを大変光栄に感じる。先輩方が築いて下さった素晴らしいオリエンテーションの歴史に、自分たちが築いたオリエンテーションは新たな1ページを刻みこむことができたの

ではないか、と思う。

最後に…。先生方を初め、助手の方々、補助学生の方々、学生部会、新入生の皆さん、更にご支援を頂いた応用化学会、誠にありがとうございました。

応化教室近況

平沢 泉教授 分離技術会2005 技術賞受賞

受賞題目「晶析式フッ酸処理・回収装置エコクリスタの開発」

理工学術院 応用化学専攻 平沢 泉教授は、分離技術会2005（6月4日～6月5日／大阪市立大）にて、表題の開発で、栄えある技術賞を受賞しました。この開発は、オルガノ株式会社との産学連携で成し得たもので、半導体廃水などに含有されるフッ素イオンを高い除去率で除去すると同時に、高純度のフッ化カルシウムとして回収するもので、21世紀の循環型社会の構築にも貢献する成果です。従来のフッ素の除去法は、微細結晶を凝集沈殿させるもので、固液

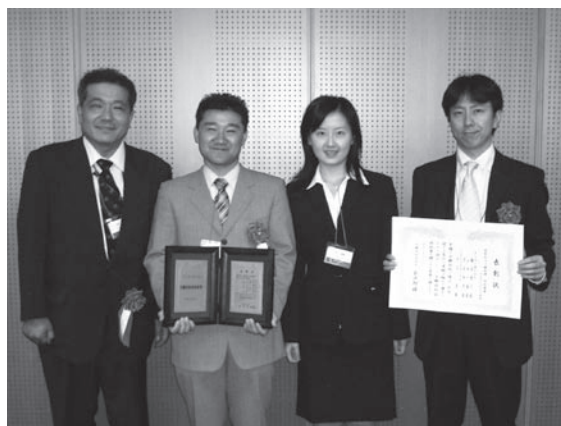
分離が困難で、また沈殿物を廃棄・埋め立てする必要がありました。今回、受賞のプロセスでは、ナノサイズのフッ化カルシウム結晶を種結晶表面に、緻密にかつ、選択的にビルドアップさせる晶析操作・装置を開発して、除去と高純度結晶の回収を同時に達成しています。この装置は、国内で、すでに5機が稼働しており、フッ酸の廃水処理、ならびにフッ素資源の循環に寄与しています。

（文責：平沢研 博士課程1年 棚橋 昭夫）

分離技術会2005 学生賞受賞

平沢研究室 応用化学専攻修士1年 ^{き れいねん} 季 麗楠（上海出身）

受賞題目「晶析法による高濃度フッ素廃水処理のための最適操作条件の確立」



季 麗楠さんは、分離技術会2005（6月4日～6月5日／大阪市立大）にて、表題のテーマで、学生発表150件の中から、みごと栄えある

学生賞を受賞した。この研究は、半導体廃水などに含有される高濃度フッ素イオン（1000～5000mg/ℓ）を十分な種結晶の存在下に、攪拌型晶析プロセスにより、除去・回収するための最適な操作条件を確立したものである。そこでは、反応過程で生成したナノサイズの微結晶を、装置内で緻密に凝集・配列させるとともに、装置内の結晶の懸濁率を至適条件で操作することにより、従来不可能であったフッ素濃度1000mg/ℓ以上の条件においても、粗大で、かつ純度良いのフッ化カルシウムとして回収が可能になることを見いだしている。この研究は、将来の物質循環型社会の構築にも寄与する成果です。

（文責：平沢研 博士課程1年 宮坂悦子）

4th International Symposium on Electrochemical Processing of Tailored Materials (EPTM) 2005 Poster Session Award

佐藤裕崇（専任助手）

受賞題目 「FORMATION PROCESS OF MICRO-GLASS-TUBE ARRAY FOR FLUID DEVICE
BASED UPON Si ELECTROCHEMICAL ETCHING AND THERMAL OXIDATION」

・概要

本会議は、電気化学的プロセスを用いた材料開発、デバイス構築に関わる国際会議です。第四回目にあたる今回は 2005年10月に開催されました。本会議のポスターセッションにて、電気化学的なSiの エッチング技術と熱酸化を組み

合わせたプロセスを用い微細なガラスチューブの形成について発表しました。プロセスの精密性、構造体の独創性などを評価され荣誉ある賞を頂きました。今後は、この構造体を流体デバイス等へ応用し、マイクロリアクターなどへ展開したいと考えています。

第13回国際粘土会議での講演で、日本粘土学会より優秀講演賞 村上淳之介（黒田研究室）

第1回アジアオセアニアセラミック連盟国際会議でポスター賞
瓶子克（黒田研究室）

黒田研究室の下嶋敦客員講師画日本ゾルゲル学会でポスター賞

日本学術振興会の日中韓フォーサイト事業に採択され、「新規メソポーラス材料の合成と構造解明」のテーマで3年間のプログラムを走らせることになった。

中国側代表者 Dongyuan Zhao教授

韓国側代表者 Sang-Eon Park教授

日本側代表者 黒田一幸

11th IUPAC International Symposium on Macromolecule-Metal Complexes 庄司雅己君(西出研修士2年) Macromolecule-Metal Complexes受賞

約100件のポスター発表の中から2件が選ばれるもので、酸素濃縮能とプロトン伝導性をあわせもつ新しい高分子膜の合成と評価に関する発表が評価され、今回の受賞となった。



平成17年度 化学工学会 関東支部大会 学生賞

酒井・小堀研究室 修士課程2年 小松 寛 君

受賞題目 脂質/タンパク質からなる薄膜型バイオセンサを指向した安定薄膜基材の開発

常田研究室 修士課程2年 古川和寛 君

受賞題目 細胞内機能遺伝子のin situ検出手法の体系化

常田研究室 修士課程2年 松本慎也 君

受賞題目 バイオフィルム内の微生物生態構造の実験的解明およびシミュレーション解析

去る平成17年8月4、5日に、化学工学会関東支部50周年記念大会が早稲田大学総合学術情報センター・国際会議場にて開催されました。ポスター発表のセッションでは、全国から27名の学生が集まり、活発な議論がおこなわれました。優秀な研究発表者には、化学工学会から化学工学会関東支部大会学生賞が与えられましたが、その中に早稲田大学化学工学系研究室の学生が3名選ばれました（酒井・小堀研究室 小松 寛 君、常田研究室 古川和寛 君、常田研究室 松本慎也 君）。非常に喜ばしいことであり、彼ら3名の今後の更なる活躍が期待されます。



3名の受賞者を囲んでの記念写真(左から2人目：古川和寛 君、4人目：小松寛 君、5人目：松本慎也君)



関東支部長の長棟輝行教授（東大・工）より表彰を受ける小松寛君

日本化学会85春季年会における「学生講演賞」

岩崎 勇一郎（博士課程2年）（桐村研究室）

講演題名 「新規な可逆的脱炭酸酵素の精製および遺伝子解析と γ -レゾルシン酸の選択的生産への応用」

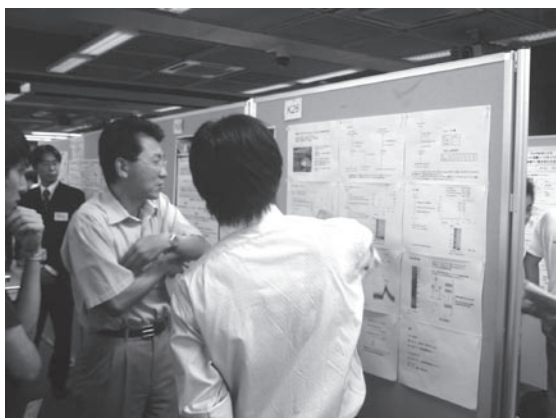
新博士誕生

2005年 3 月

氏 名	論 文 題 目	指導教授
星野 辰彦	硝化グラニュールを用いた窒素除去および細菌機能遺伝子のinsitu検出手法の開発	平田 彰
吉江 幸子	高塩濃度条件下での脱窒に関わる微生物の生態解析と貴金属回収工程廃水処理技術の開発	平田 彰
土肥 直樹 (課程外)	多段翼または大型翼を用いた混相流攪拌反応器内の流動に関する研究	平田 彰
浦崎 浩平	金属酸化物中の格子酸素を利用した水素製造用触媒の研究	菊地 英一
長瀬 健一	新規人工鰓システムによる水中からの高効率な酸素の取り込み	酒井 清孝
服部 浩二	分子インプリント薄膜のゲート効果に関する基礎研究	酒井 清孝
小倉 尚	グリコシル化を鍵反応とする数種の天然物の全合成	竜田 邦明
川治 純	垂直磁気記録媒体用磁性材料ならびに微細構造体の開発に関する研究	逢坂 哲彌
瀬山 倫子 (課程外)	環境ネットワークセンシングのための化学センサデバイスの開発研究	逢坂 哲彌
本川 慎二	MEMS技術を利用した新規平面型構造を有する超小型直接形メタノール燃料電池の設計と作製	逢坂 哲彌
岩崎 知一	チア複素縮合環高分子の合成とらせん π 共役系	西出 宏之
村田 英則	ポリ（アルミニウムラジカル）の合成と室温スピン整列	西出 宏之
池口 真之	酸素イオンー電子混合伝導体を用いた非対称空気分離膜の開発とメタンの部分酸化への応用	松方 正彦
佐藤 裕崇	電気化学的手法による三次元微小構造形成プロセスおよびその機能デバイス応用に関する研究	本間 敬之

早慶ワークショップ2005年

2005年8月27日
専任講師 小堀 深 早稲田大学理工学部55号館



去る8月27日土曜日、早稲田大学と慶應義塾大学の化学系学科の合同研究会である早慶ワークショップが早稲田大学理工学部55号館で開催された。当日は残暑が厳しく、外を歩くだけで汗をかくほどであったが、参加者総数126名を集め盛大に行われた。応用化学科主任清水功雄教授の開会の言葉で始まり、15時30分から17時までポスター発表会が開催された。発表者は早稲田応化が16名、早稲田化学が14名、慶応応化が25名、慶応化学が9名の計64名であった。

早慶両校から選抜された学生だけのことはあり、非常に高度で有意義な議論が展開されていた。

学生と教員が全員審査員となり、64名のポスター発表者の中から優秀賞を決定した。慶応から2名、早稲田から1名の優秀者が表彰された。早稲田から選ばれたのは応用化学科博士後期課程1年小川竜平君で、発表タイトルは「キラルパラジウム触媒による双環状アリル化合物のエナンチオ選択的反応」であった。

ポスター発表会のあと懇親会が行われ、非常に和やかな雰囲気の中、早慶化学系の関係をより深くすることができた。来年度は慶応主催で日吉にて開催される予定である。今後もよきライバルとして慶応との交流を進めていきたいと考えている。



同窓会報告

石川研究室同門懇親の集い

佐藤 文昭（三菱重工・同門会幹事）
（昭和47年応用化学科卒・新22回）

恒例となっている毎年6月の第2土曜日の石川研究室同門懇親会。本年も6月11日に46人の会員が有楽町のニュートーキョー“ラ・ステラ”に参集しました。

最年長は昭和21年卒、最年少は先生が亡くなられた年の卒業生すなわち48年卒で、その年齢差は2回以上です。我々若輩者を除き、諸先輩方は皆、日本の高度成長の担い手であり、それを支えたActive且つAggressiveな猛者連です。



石川研究室卒業という共通点のみで、これだけ多くの人が集まり、年齢差を越えて気兼ねなく懇談できるのは、石川先生の薫陶の賜物だと思います。久しぶりに先輩や同僚と会ったその瞬間、思いは時空を超え、学生時代の当時に戻ってしまうのは、なんとも不思議です。

今回ゲストとして、39年卒の野際基実先輩の実姉で、女優の野際陽子様に、ご多忙中にもかかわらずお越し頂き、スピーチを頂戴しました。彼女は弟さんからこの同門会のことを「アカデミックで素敵な会」と紹介されたとのことですが、アカデミックは疑問符ですが、素敵な会であることは確かです。ビールを片手に、軽妙且つユーモアたっぷりの彼女の話振りは、非常に生き生きとしており、さすが元NHKのアナウンサーと敬服しました。また、69歳という年齢を感じさせない若々しさの根源は、日々充実した仕事をされているからと思いました。

また、42年卒で1830年創業の有田焼の窯元

「しん窯」社長、梶原茂弘先輩に佐賀よりわざわざご出席頂き、興味深いお話を聞かせて頂きました。このような先輩が各所にご健在であるのは、若輩者にとって、とても心強いことです。

石川研究室の諸先輩との歓談でいつも感じるのは、皆、酒を呑んで騒ぐのが好きなだけではなく、常に多くの知己を得て世界を広げていこうとするその前向きな姿勢です。この会のモットーは、「来るものは拒まず、去るものは追わず」であり、まさに石川先生の教えが踏襲されています。

今年は石川先生の33回忌。杉並区の清見寺にある先生の墓石には、「天徳院勤学是道居士」という戒名が刻まれています。「あまたに徳を敷き、勉学に励み、正しい道を歩まれた」、と拙者は解釈しています。

来年もまた諸先輩方や同期生に会うことを楽しみにしております。また、石川研出身者でなくても、石川先生にお世話になったとか、先生のお人柄に今も慕っているなどのよい思い出をお持ちの方であれば、この会に参加されること大歓迎致しますので、下記幹事にご一報頂けると幸甚です。

現在の幹事は、柳澤亘（33）、中西昭満（34）、奥川実（36）、加藤喜隆・神戸正樹・飯塚俊一（39）、比留間哲生・井上徹裕・窪田信行（40）、宮島猛男（41）、室賀五郎（42）、佐藤文昭（47）……カッコ内は学部卒業昭和年。

（2005・6・13記）



花王すみだ事業場稲門会

文責 山崎律子（旧姓：後藤）（41回生）
（平成3年応用化学科卒・新制41回）

花王(株)の研究開発部門には東京研究所（すみだ事業場）、和歌山研究所、栃木研究所があります。東京研究所の中には研究開発部門、知的財産センター、ヘアケア研究所、スキンケア研究所、ヘルスケア第1研究所、ヘルスケア第2研究所、包装容器開発研究所、香料開発研究所が所属しており、各部門にて多くの早稲田大学応用化学科卒業生が活躍しています。

「花王稲門会」としては正式な活動は行われていないのですが、昨年7月に花王(株)すみだ事業場の研究開発部門に所属する早稲田大学OB、OG（全学部）による懇親会が行われました。

○出席者：21名

相川博俊、赤荻亮*、五十嵐崇訓、今村孝、岩井秀隆、上原孝一、上山健一、久保山路子*、黒田茂、後藤祐子、坐古芳郎、鈴木裕二、十時信太郎*、直井由紀*、中尾啓輔、船田公一、松尾貴史、松本州平*、南浩治*、森かつら、山崎律子

（敬称略あいうえお順 *は応用化学科以外の卒業生）

花王(株)早稲田OB OGは、あまり「群れない集団」という印象があります。初めてお話するOB同士も多いことから、しんみりした雰囲気になってしまうのではないかと少し不安だったのですが、本当に全く筋違いの心配で、時間があっという間にすぎ終了予定を1時間もオーバーするほどでした。私が入社して以来初めてという懇親会でしたが、ふだんの業務とは少しちがった「くくり」で、楽しい時間が過ぎました。

大久保キャンパスで過ごした大学生活はたった数年ですが、それでも「早稲田」で過ごした期間は、同じ雰囲気を着せてくれているのでしょう。そして、お互いに心のどこかで「同士」としての意識があり、また早稲田のOB OGであることは、困難な場面での精神的な励みもなっているのだと感じるひとときでした。



宮崎研OBの皆様へ

宮崎先生の奥様から、先生のお部屋を整理していたら、OBの卒業論文・修士論文が見つかったとの連絡をいただき、私がお預かりしています。そのうち、下記の方について、連絡先が不明です。2005年12月末日まで保管しますが、それ以降は処分します。

ご自分のもので、必要な方はご連絡下さい。料金受取人払いでお送りします。

なお、友人で連絡先をご存じの場合は、ご一報下さい。また、この内容は、応用化学会ホームページ (<http://www.waseda-oukakai.gr.jp/>) にも掲載しています。

連絡先 〒169-8050 東京都新宿区早稲田町27-7
早稲田大学知的財産本部気付
藤本 暁一 (1969年卒)
TEL 03-5286-8380
FAX 03-5286-8390
Mail rfujimoto@waseda.jp

卒業年次	氏 名	卒業年次	氏 名	卒業年次	氏 名	卒業年次	氏 名
1967	坂野 泰明	1984	林 雅俊	1987	江崎 竜一	1990	内田誠一郎
1978	松丸 英明	1984	山中 浩	1987	劔持 泰明	1991	鈴木佐枝子
1978	中野 茂	1985	波川 忍	1988	斉藤 則之	1991	番場 伸一
1979	佐藤 久子	1985	伊崎 暢	1988	勢川 洋章	1991	山田 江南
1981	竹内 久雄	1985	長井 均	1988	青木 誠人	1993	川端 覚
1982	後藤 隆	1986	宮岡 尚	1988	神能 竜知	1993	川村 文彦
1983	早野 智明	1986	小林 豊	1989	横井 敬史	1993	鯨島 浩
1984	佐々木 豊	1987	久保田晋一	1990	村上喜三郎		

会員だより

私の脳出血とリハビリ

茅原 伸光

(昭和35年応用化学科卒・新制10回)



平成9年1月29日午前10時過ぎ、私を取り巻く世の中は、ガラッと180度かわった。

それは朝の営業会議を終え、東銀座から六本木に知人に会うために向かったところで起こった。六本木には先に着いたので、席を取り2、3言葉を交わしていると言葉が飛ぶようでまともに発音できないことに気がついた。何度か確かめたが言葉の異常さは明らかだった。

すぐに近くの医院を案内され、自分の症状を説明したが医師にははっきりとは伝わらず、なによりも目の前の何かを訴えようとしているものの異常さが、何であるかを医師は感じてくれたが、ものの数秒後に私は前に倒れこんだ。

すぐに救急車で都立広尾病院に搬送され処置を受けたが、入院は断られ、そのまま北品川病院へ収容された。

その間私の視力、聴力は残っていたようだが、直後人事不省に陥り、ふたたび気を取り戻したのは2、3日後で、全くの麻痺状態でそれは1か月以上つづいた。

一方家内はパーキンソン病で寝たきりの家内の母を抱えて動くに動けず、まずは母を完全看護の病院と交渉、入院させ、北品川病院に来たのは夜の7時であった。病院側の対応は押して知るべしで、家内は私の再起不能を宣告されていた。

3日後、家内の母の伝で虎ノ門病院分院に転院、私の入院7か月に及ぶ闘病とリハビリが始まった。私の病名は、左脳の脳出血、左脳が侵されているため、右半身不随と言語障害が特にひどかった。私は日本アイ・ビー・エムを55歳で早期定年プログラムにより退職、当時は人材派遣会社を営んでいて、早朝から夜遅くまで勤

務し充実した毎日であった。

50歳のとき大腸癌を築地のがんセンターで手術を受けたが、それ以外は血圧が徐々に上昇気味で以前から治療管理を受けていたが、倒れる1週間前、目の前を虫が飛ぶような現象が数回起こったものの病院に相談に行く時間的余裕はなかった。というより自分は癌という大病はしているけれど体は丈夫なんだと、妙な自信があったのか、目の前の変化、予兆も見逃し終には大事に至ったのだと思う。

虎ノ門病院でのリハビリはP T(五体を訓練)、O P(指先を対象に小物作業)、S T(言語の読み書き話し方)からのプログラムが1日2～3セッション(1～1.5hrs/セッション)組まれていた。

プログラムが開始されて3週間P T,O Pはそれなりについていけたが、S Tには全く歯が立たず、というより言葉を失った人間がどのような方法によって回復できるのかと考えたとき、呆然自失目の前が真っ暗になってしまった。とにかく自分が日頃使い記憶していた言語の90%以上をブラックアウトしているので、別の記憶域に再構築および、記憶の甦らせる必要があるといわれた。

その様な時に医師から、“あなたはもう社会への復帰はない、背広も着るチャンスはない”と宣告されたことも重なって、家族のこと、仕事のこと、1人思い悩みはすれど何の考えも思いつかなかった。しかし思いあぐねた末に兎に角自分に出来ることを1つずつ解決していくしかないと考え、与えられるプログラムに忠実に挑戦していこうと決心した。

毎日車椅子にさせられ教室に連れて行かれる

繰り返してあったが、3週間も過ぎるころ少しずつ変化が感じられた。少しでも早く効果が出るようにと、病院の正規の治療とは別に、毎日こっそりと中国人の気功師を病室に呼び、気の治療を受けマヒ状態を少しでも軽減しようと家内もまた必死であった。

2ヶ月を経過する頃、車椅子生活は相変わらず続けており、立ち上がったたり、直立の姿勢を鏡で見ること無かったが、あるとき立ち上がり両腕を左右に開いて、十字を形どったとき、驚きにわが目を疑った。十字どころか腕の意味も無く開いて立っているのだ。すぐに知り合いの紹介で、股関節 背骨の節々から全身の関節を、回転させ正常に作動させる整体師を知り、病院をこっそり抜け出し洗足まで通った、以後1年半治療を続けた。

この間言葉の訓練は進んでいた

読み：教本、“水馬赤いな、アイウエオ。浮藻に小蝦もおよいでる”アナウンサーも使っている同じもの。

書き：鉛筆を左手にもち金釘流ながら、右手より力強く書けるようになっていた。

話し方：雑誌の記事を読んで感想を話す。ただどしいがここまで出来ていた。

虎ノ門病院分院の朝は6:00AMに始まる。起床洗顔後、教本新聞の音読を連日、退院後の今も腹式呼吸による新聞の音読を続けている。

腹式呼吸による発声法は家内に心得があり、何時も駄目出しをされ、最後は喧嘩になるのが落ちなのだが、表現にいつも力強さが込められていなかった。

現在病気を発症して8年半、どうやら小康を保っている。この間家族にかけた精神的経済的負担は並大抵のことではなく、感謝しきれないほどだ。同時に家内は翌年春肺癌 2年後に子宮体部癌と2度の手術にも動ずることなく耐えてきたが、お互い余生を元気に送りたいと祈るばかりである、

しかしこれで病の原因が洗い出されたわけではなかった。2年前に家内が夜半に目が覚めると、私の呼吸が断続的に止まっているのに気が付いた。無呼吸症候群と検査の結果判明し、脳出血発症の大きな一因であったようである。

それに長期に服用した薬の副作用に苦しめられた。2年程前に腹部や背中に発疹に悩まされ、西洋医学による一年間も効無く、飯田橋の

漢方医で3か月で収まった。同時に併用した人参ジュースによる体質改善は大いに役立ったといえる。

朝食は、人参3～4本リンゴ1個 でジュースを約500ml飲んでいるのみ

昼 ざる蕎麦

夜 和洋中華 フルコース

以上の献立を伊豆の山中にサナトリウムを開設された医師に指導され、1年9ヶ月になる。体調もよく肥満も解消し、なによりも顔色がよくなったといえる。それに夜のフルコースが楽しみで、勿論御酒付きで結構なのだ。

今は家内と一緒に温泉旅行を楽しみ、また細々と仕事も続けている。

以上、私の浅薄な体験でございますが何かの参考になれば幸いです。



北アルプスと松本城 並木俊之助(新9)
生まれ故郷の久しぶりの信州。遅い春が一気にやってきました。梅と桜の花と一緒に咲き、冬の白い北アルプス(真ん中は常念岳)に囲まれ、黒い松本城が映えてコントラストが見事でした。
(平成17年4月9日撮影)

総会ハガキより

毎週詩吟と囲碁をやっています。近くに同期生の木村君が居るので時々一杯やるのを楽しみにしています。

長澤畿（昭和16年・工経4回）

視力低下をかこちつつ最後のご奉公、週2日の通勤を続けています。

犬塚克己（18・工経7）

ケアマンションに入居し、余生を送っております。

富里與三（20・燃料1）

草炭研究会は相変わらず資金難に喘ぎながら運営しております。ご寄付は喜んでお受けいたします。

藤田耕平（26・燃料7）

近々97才の誕生日を迎えるに当たり若き日の学生時代を思い出しても嬉しい。わが応用化学会の益々の御発展を祈っています。

河野和夫（7・旧12）

相変わらずの毎日ですが、今では古い仲間が少なくなって心寂しい。未だ当分はViraceで行きたいもの。

中岡敏雄（12・旧17）

93才、健康状況は良好だが、環境状況が近頃とみに困難になってきました。年をとると生きるのがなかなか大変になりましたね。

橋爪惟公（14・旧19）

元気で暮らしておりますが、歩行がきつくなってきました。長沢氏の協力でクラス会をやりたいですね。

芝山正（16・旧21）

案外元気に生きていますが、90歳を超しましたので自由に動くわけに行きませんので失礼いたします。諸兄のご活躍とご健勝をお祈りいたします。

木下巖（16・旧22）

○長生の秘訣も知らず生きている、○又春が来るから桜はいさぎよい、○ひきかえすわけにはいかぬよわい哉

有賀元廣（17・旧23）

昨年入院生活を送ってから体力の回復が十分でなく弱っています。

小池忠夫（17・旧23）

総会、講演会の盛会をお祈りします。（小生事、高齢、体調不調のため出席できませんが）（俳句若干）（3.20）お彼岸や紅梅いくつ園かざり、（4.8）陽春や桜並木にこぶしあり、（4.9）濠の端艶やか華やか万丈と、（4.9）微風にもふぶき散る杜街、（4.19）目覚めよとあおいやつつじ何言わず。

斉藤實（17・旧23）

体調不良のため外出を控えております。年の故かどこかよくなると、別のところが悪くなるという調子です。

種村哲哉（17・旧23）

老齢86才。少しずつボケが近づき名前などとなさに出ないことが多くなっています。昨冬妻に先立たれました。

瀧本汪明（19・旧24）

米寿に今少し、日々を大切に頑張っています。趣味の洋画で個展第20回目予定。化学の世界でも学問、技術共に発展で目を見張ります。総会不参残念。ご盛会を祈る。

勝屋徹（19・旧25）

お蔭様で年齢なりに元気です（83）。会員諸賢のご健康とご活躍をお祈りいたします。

松山晴雄（20・旧26）

16年経過したのに四回目の口腔内癌が再発、単に切除手術を受け、幸運にも嚥下、？音状態は術前と同様で、只今は元気です。

西山尚男（21・旧27）

昨年胃の全摘手術を受けましたが、元気に過
ごしております。4月15日応化クラス会を高田
牧舎で行いました。生存会員15名中10名出席、
盛会でした。

長谷川宏 (21・旧27)

年とともに往時茫々という感じです。

大原敬一 (23・旧29)

日曜毎、子供達と汗を流すのを楽しみにして
いましたが、最年長ということで(社)日本空
手協会兵庫県本部長を命じられました。

川口史郎 (24・旧30)

早いもの、今年で喜寿を迎えました。会の
益々の発展を期待致します。

大江昭二郎 (26・旧32)

アレクサンダー大王東征路見聞記を執筆中
です。トルコのトロイからイラン、アフガン、パ
キスタンへと3年計画です。乞うご期待！

大野正雄 (26・新1)

高等学院時代の同級生と年に2-3回の会合
を楽しんでいます。年齢も高くなり遠路の外
出も控えています。

岡田実 (26・新1)

定年后東京心理相談センター(所長生月誠心
理学博士)に於いて、認定心理カウンセラーと
して従事して17年になります。現在は週1回木
曜を担当して水道橋まで通っております。

樋口欣一郎 (26・新1)

学報、応用化学会報等により学校の様子を見
ておりますが、今後の発展、隆盛を祈ります。10
年余前に会社を退き、これからは人生を楽し
むことに頭を切り替え余生を楽しんでいます。

水野高光 (26・新1)

早大応化会のご発展をお祈りいたします。小
生も喜寿も過ぎましたがお蔭様にて元気にして
おります。現在市内の大学の講座に出席し、バ
イオ、マテリアル、政治、経済などの勉強をし
ています。

山田文昭 (29・大2)

内科的にはまったく健康ですが最近右脚を痛
め杖を使用しているため現状であり遠出は出
来ません。

岡本敦巳 (27・新2)

同期の数人と毎月囲碁の集いを行っています。

白木朝康 (27・新2)

日中交流事業、特に更新技術の事業化推進に
先進しています。

宇佐美盛爾 (30・大3)

喜寿を迎える年齢となりましたが、先ずは元
気に、地域のボランティア活動など、何かと忙
しく過ごしております。

身内茂 (28・新3)

50年間務めた職場を昨年退職しました。体調
も少々不良がちで静養中です。

鹿島源一 (29・新4)

年齢相応に元気にしており、生き甲斐ある人
生を送りたいと努めています

塚本光彦 (29・新4)

宇宙に関する化学啓蒙書などを読んで静かに
暮らしています。

橋本幸雄 (29・新4)

早大文学部近くに小さな部屋を借り、趣味的
な執筆をしています。

山本明夫 (29・新4)

すっかりご無沙汰していますが、何とか元
気に過ごしています。化学とは縁のない生活です
が会報やお知らせが唯一の化学との出会いです。

池田毅 (30・新5)

胃ガンの手術をしてから2年経ちますが体力
が回復せず、あまり歩けません。

伊東淳 (30・新5)

未だ、技術の責任者として会社の面倒を見て
います。元気にやっています。

木村紘 (30・新5)

只今水と健康のSTSプロジェクトや***エネルギー***学会に入り総合医療の勉強をして皆様のお役に立ちたいと思っています。

嶋根政彦 (30・新5)

私用先約ありで欠席とさせていただきます。現在小康を得てゴルフ、ウォーキングの会、区民会議委員etc。足腰を鍛えてやや多忙な毎日です。会の盛会を祈ります。

山内清三 (30・新5)

学生時代の友人や会社勤務時代の仲間と元気に楽しく遊んでいます。

脇坂侃 (31・新6)

先日平田彰君の会に参加し多くの人と旧交を暖めました。

伊藤諦 (32・新7)

現在、当地・茂原での生活を楽しみにしています。

大谷眞夫 (32・新7)

体調崩しています。残念です。

佐藤健次 (32・新7)

近畿化学協会化学技術アドバイザーをしていますので、関西の方、よろしく願いいたします。

島雄 (32・新7)

70歳を過ぎると残念ながら以前のようなファイトが失せてきます。もう一頑張りしたいと思います。頭の体操をストレスを背負わないように努力、どりよく、ドリヨク……。

今泉徹 (32・新7)

ビタミンCとエビオスを朝晩野菜ジュースで飲み、ミカンを食べ、食事は魚と野菜が中心で、肉は少なめ、休日もちこち散歩して酒休2日制、健康第1です。

西村孝雄 (32・新7)

仕事は昨年3月にやめました。その間、心筋梗塞、胃ガン、肺ガンと病気のオンパレードでしたが、一段落し今のところ元気です。

岡崎寛一 (32・新7)

山梨県の小淵沢町にいます。毎日山を見ながらの生活ですが、自然を楽しんでいます。

友田和助 (32・新7)

元気にいたしております。理総研のProjectで働いております。応化はじめ新しい理工系の再編に期待とご発展を念じております。

土田英俊 (35・大8)

古希を過ぎましたが元気です。しかし視力が落ちたので夜は活動が不都合です。

関口安貞 (33・新8)

本年も何とか現役で頑張っております。

藤山和夫 (33・新8)

宇宙膨張論も、相対性理論の光速の考え方も、根本的に間違っている。生きているうちに、はっきりさせたい。皆で力をあわせれば出来る。

阿武靖彦 (34・新9)

退職して7年になりますが、幸い健康に恵まれ、ゴルフ、ウォーキング、囲碁等で楽しい日々を送っています。

興水勲 (34・新9)

ボランティアで社会福祉法人の理事をしており、最近の構造改革に伴い、対応に多忙です。

佐川昭夫 (34・新9)

季節感溢れる大好きな札幌で心行くまでシニアライフを楽しんでいます。

磯崎昭 (35・新10)

定年退職して4年目、私学の非常勤講師を週2日しながら花壇作り、果樹の手入れ、雑草退治に励んでいます。

小谷野猪之助 (35・新10)

北京清華大学材料科学工程系にて「ナノテク材料」の講義を週2コマしています。

宮崎栄三 (35・新10)

週2日、技術者派遣会社の顧問を続けています。

天瀬田久二 (36・新11)

地域活動に専念し忙しい毎日を過ごしています。貴会の益々の発展を祈ります。

奥川實 (36・新11)

3月末で完全フリーに。さあ思い切って遊ぶぞ!!皆さん、諸行事に誘ってください。

堀内弘雄 (36・新11)

サイエンスボランティアとして、日本宇宙少年団(日立分団)に関係し、子供達の理科実験の指導に当たっています。また、ワセオケOBの演奏活動を続けています。

戸波宗彦 (36・新11)

現役リタイヤーして10ヶ月過ぎました。好きなことだけして楽しく毎日過ごしています。4月下旬スペイン旅行をして楽しんできました。

井上征四郎 (37・新12)

定年退職した後、一貫して途上国技術協力の仕事に携わっています。現役時の仕事に多少関連し、途上国のお役に立っていることが何よりです。

井上成之 (37・新12)

お蔭様で体の方は何とか元気です。生活は明けても暮れても囲碁中心の毎日で、6月には大学も高校もアマ強豪・三浦浩氏などとともに群馬県の方に囲碁の合宿に行く予定です。

志村輝明 (37・新12)

新緑の候、特に変わりなく、楽しく静かに生活しております。仕事もホドホドで、健診OK。

西敏史 (37・新12)

本年3月9日、応化会での中嶋氏の講演は大変良かったです。(同期のサクラです!)

前島哲夫 (37・新12)

少しでも社会に恩返しするつもりで、京都を訪れる外国人観光客のための情報提供、同行案内のボランティアをしています。

高野敏明 (38・新13)

元の会社でのアルバイトと横須賀の産業活性化を図るNPOの産業研究会に参加するように

なりました。

王義雄 (38・新13)

病氣療養中(自宅)

浜野雅一 (39・新14)

応用化学会誌でなつかしくおもっています。小生、特許関連業務、ゴルフ、囲碁で頑張っています。

沢崎哲夫 (40・新15)

再就職に1年余、働くことの楽しみを感じながら新しい任務に充足感を持って務めています。

服部英昭 (40・新15)

昨年11月に名古屋支店に転勤となりました。名古屋は愛・地球博を中心に非常に元気のある地区で、日本の原点である「ものづくり」に徹していることによると思います。もう少し私も頑張ります。

井上凱夫 (41・新16)

9月末青梅市と姉妹都市ドイツ・ライン川沿いの町ポッパルトへ行き、コーラス演奏会をするのでドイツ語の勉強を始めました。

宮岡寛 (41・新16)

三越の日本橋本店で毎年作陶展を開いています。私達が育てた職人さん達を全面に出しています。

梶原茂弘 (42・新17)

今年の1月に会社生活に終止符を打ちました。現在は孫守りとジム通いの毎日で何をしようかと思案中です。

神力紘明 (42・新17)

アウトドアスポーツ(テニス、スキー、ハイキング等)と読書(特に歴史小説)を楽しんでいます。

坪田正行 (42・新17)

昨年定年で退職、年金生活に入りました。2〜3回/週のスポーツクラブでのトレーニング、ゴルフ、全国の温泉巡りと元気に過ごしています。

三島邦男 (42・新17)

定年後、田舎に引っ越しました。

安村弘之 (42・新17)

本年で定年退職となります。

剣持敬三 (44・新19)

国際特許・商標・意匠調査の仕事を続けております。日米欧韓中の特許戦争は、激しさを増しています。

谷豊彦 (44・新19)

5月の連休中に、上高地で初めてテント泊3泊を経験しました。蝶ヶ岳から見る穂高連邦は格別でした。

加賀谷峰夫 (45・新20)

テーマも、体制(産学協同)、運営(コーヒースタロンで討議の活性化)も大変素晴らしい企画と思います。たのもしい限りでご成功を祈る。

飯田康夫 (46・新21)

三井物産系の商社に出向してはや8年目、元気にやっております。子供達も社会人となり少しほっとしていますが、まだまだ頑張ります。

宮崎慎司 (47・新22)

JFEスチール発足して2年経ちました。私は鉄に軸足を置き、環境、エネルギーと幅広く頑張っています。

有山達郎 (48・新23)

昨年末、4年半のギリシャ勤務から戻ってきました。

菊池達郎 (48・新23)

8年ぶりに工場から本社に戻りました。品川駅港南口ニュータウンを満喫しています。

宮崎誠 (48・新23)

21世紀は「知」の時代。その「知」を支えるものは文化・芸術であることを改めて認識することが日本人にとって必要であると最近つくづくと思う。

村山元信 (48・新23)

直江津の地に来て22年と4か月になります。

昨年の中越地震でも幸いまったく被害はありませんでした。

岩間啓一 (49・新24)

今年、会社を作って15年目になりますが、今後の会社の方向性についてM&Aを含めて考える日々を送っています。

伊藤理 (51・新26)

入社29年で8度目の転勤となり10年ぶりで再び販売の第一線に就きました。

香取典男 (51・新26)

久し振りに東京都民になりました。交通が大変便利になっていて驚いています。子供が2人とも高校生になり、休日の行動は「女房と2人」というのが多くなりました。

竹内亮 (51・新26)

現在、ベトナム(ホーチミン)に駐在しております。ベトナムおよび東南アジアは活気がありやりがいいのある仕事だと思っています。

畑野憲文 (51・新26)

同期の会をやしましょう。

平沢泉 (51・新26)

埼玉県教育委員会で小中学生の理科離れ科学技術離れに頭を悩ませています。理工系学生の優遇しか対策はないのでしょうか。

永井博彦 (52・新27)

モノづくりに日が当たる昨今の風潮を、好況感とともに大切にしたいと思います。

石川厚史 (55・新30)

本社で安全、品質管理に従事しています。トラブル対応、ISO9001、リスクマネジメントへ取り組んでいます。

新藤隆彦 (55・新30)

最近、学外の仕事が増えました。「市民公開講座」の企画・運営などがその理由です。大学は若い人だけを相手にしていれば良い、という時代は終わったのかもしれませんが。

山下明泰 (55・新30)

2004.4月～2005.6月END、中国上海駐在中です。

和田浩 (55・新30)

先日、下井先輩に当社を見ていただき、いろいろと指導していただきました。有難うございました。

原薫 (56・新31)

3月より本社(品質管理部)に異動となりました。初めての業務が多く1から勉強しています。また、相変わらず単身赴任中です。

天田順一 (57・新32)

昨年12月から再び東京に戻ってきました。今年から東南アジアとの仕事が増えます。時代の流れでしょうか

小澤喜久夫 (57・新32)

4月から関東学院大学工学部に勤務しております。教育に研究にと毎日ばたばたしております。

小岩一郎 (57・新32)

昨年より、博物館の学芸員(火山地質学)として勤務しております。

笠間友博 (57・新32)

2月に自宅に戻りました。応化の就職関係のサイトにOBからのメッセージを書くよう依頼され先般原稿を出しました。

大塚和孝 (58・新33)

皆様いかがお過ごしですか?現在は環境関係の仕事をしてありますが、いろいろと応化会の方ともお世話になりネットワークの大切さを感じています。

岡部正明 (58・新33)

人事部にて大学訪問を行っています。

貝沼雅人 (59・新34)

機械屋に足をふみいれて久しいですが、意外にも化学の知識が役に立っています。皆様に喜んでいただけるような車創りをしています。

斉藤雄之 (59・新34)

CRIの推進から、コンビナートの省エネ連携まで幅広く担当し、企画立案から実行に至るプロセスをエネルギーに進めております。

新井裕 (59・新34)

学会等でヘルシアの展示説明をしています。3月に烏龍茶を出しました。一度試していただけたら幸いです。

十時信太郎 (60・大35)

福山での生活もはや10年になりました。

浅沼稔 (60・新35)

3年間の長浜工場の後、この4月に本社勤務となりました。

林達也 (60・新35)

熊本に新工場を建設することになりH17.11～1年半程度駐在する予定です。食べもの、人柄の良い土地と聞いているので楽しみです。

加藤伸彦 (62・新37)

岩国で単身赴任6年目に突入しました。化学業界は厳しいです。

中野哲也 (62・新37)

約1年の育児休業を終了し、2月に復職しました。

原田紀子 (62・新37)

海外に転勤中です

松村潤一 (62・新37)

14年間勤めた会社を辞め、この4月から阪大の法科大学院に通い始めました。1日も早い社会復帰を目指しています。

工藤周三 (平成1・新39)

旭化成ケミカルズ 鯉ヶ自動車用高分子材料の用途開発を行っています。日々充実しています。

佐藤尚彦 (3・新41)

この5月からニューヨークに赴任することになりました。仕事、プライベートにかかわらず、NYにお越しの際は声をかけてください。

土屋勝則 (3・新41)

次のステップへ踏み出したいものです。

福田誠（3・新41）

忙しいながらも楽しく働いています。

藤田郁子（12・新50）

個人情報保護の取り組みはいかがですか？

齋藤海仁（4・新42）

社会人2年生として自分なりに力を出しています。どうぞよろしく。

古賀勝直（14・新52）

鹿島に来て5年になります。

影山謙介（5・新43）

岩手大から東京理科大へ異動になり、研究室の立ち上げなどで忙しい毎日です。

駒場慎一（5・新43）

東京へ転勤しはや3年、去年は第2子も生まれ毎日忙しく過ごしています。

白井浩幸（5・新43）

名前が「鈴木」から「佐々木」に変わりました。育児休業中ですが、勤務先に変更はありません。

佐々木庸子（5・新43）

アメリカ駐在中

高橋正洋（6・新44）

昨夏に3年ぶりに育休から職場復帰いたしました。

佐藤恵衣子（7・新45）

ニューヨークへ転勤になりました。

熊木洋介（10・新48）

5月中に新規店オープンに伴い副主任として転勤・引越しする予定です。

高畑肇（11・新49）

結婚により名前が「水上」から「久我」に変わりました。

久我尚子（11・新49）

2004年12月～2006年12月まで2年間の予定で海外青年協力隊員としてガーナに赴任しております。ガーナで理科教師をしています。

野底勸（12・新50）

第3回21COE 「実践的ナノ化学」国際シンポジウム

会期：11月14日（月）～15日（火）

会場：早稲田大学国際会議場（西早稲田キャンパス：新宿区西早稲田1-20-14）

主催：早稲田大学21世紀COE実践的ナノ化学教育研究拠点

共催：早稲田大学、早稲田大学ナノプロセス研究所、
早稲田大学先端科学・健康医療総合研究機構「先端科学と健康医療の融合研究拠点の形成」
プログラム

協賛：日本化学会、高分子学会、化学工学会、有機合成化学協会、触媒学会、ゼオライト学会、日本化学会、日本セラミックス協会、応用物理学会、有機合成化学協会ほか（予定）

11月14日（月）

岩本 正和（東京工業大学）

植村 榮（岡山理科大学）

講演会 10:30～16:45

白井 汪芳（信州大学）

竜田 邦明（早稲田大学）

浜口 宏夫（東京大学）

J. A. Lercher（Technische Universität München, Germany）

B. Scrosati（University La Sapienza, Italy）

ポスターセッションおよび懇親会 16:45～18:15

11月15日（火）

今成 真（三菱化学）

松方 正彦（早稲田大学）

講演会 9:30～15:00

松本 和子（早稲田大学）

S. Che（Shanghai Jiao Tong University, China）

N. Hadjiladis（University of Ioannina, Greece）

V. S.-Y. Lin（Iowa State University, USA）

参加費：無料

参加申し込み方法：氏名、勤務先、住所、連絡先（電話番号、FAX、電子メールアドレス）を下記までご連絡下さい。

連絡先：21COE実践的ナノ化学事務局（担当者五艘）

〒169-0072 東京都新宿区大久保3-14-9 早稲田大学理工学部66号館6-03号室

電子メールアドレス：21COE-PracChemOffice@list.waseda.jp

ホームページ：http://www.waseda.jp/prj-prac-chem/index.html

早稲田応用化学会主催 交流会・第3回講演会・懇親会のご案内



講師：城戸 淳二氏

山形大学工学部教授、
早大応化卒（昭59年 新34回）

演題：「有機ELの展望と地域活性化」

11月21日（月曜日）17時00分～20時00分

場所：早稲田大学 理工学部（大久保キャンパス）

講演会・懇親会 会場：55号館N棟1階大会議室

早稲田応用化学会 会員の皆様、

今回は有機ELの先駆者で世界をリードし続けている熱血漢、城戸教授が「有機ELの展望と地域活性化」と題してホットな話題をお話し下さいます。

教授は 城戸＝輝度＝希土だから発光体に汎用の希土類元素を研究せよと土田教授に言われて発光の世界へ、しかも白熱電球のエジソンと同じ誕生日。運命的なスタートであったが 電球とは異なる光の世界——蛍の光は有機の光、そうです！有機ELを切り開かれた。

かのWall Street Journalが1995年に業績を大きく報じ日本が驚く。

9/29付け日経には「有機ELは金の卵」「技術立県—山形が頭角」の大きな見出しで城戸教授（学）と有機EL量産化に世界で始めて成功した天童市の東北パイオニア（産）を山形県（官）が支援し産官学で先端拠点構想を推進。開発拠点は米沢市の八幡原工業団地に立地する「有機エレクトロニクス研究所」。所長の城戸教授指導のもと県内外から16社が参加と紹介。

皆様の思いは、「照明には既に蛍光灯があるではないか？」でしょう。然しEUでは既に蛍光灯の水銀を規制、では水銀フリーの照明は？ そうです！有機ELであります。更にその用途はディスプレイの世界にも広がる…… では世界の競争の中で日本は？ ホットな話が続きます。

このような世界の権威が応化会の中にいる事は何と素晴らしい事でしょう。

皆様 この講演を聞き逃す訳にはいきません!!。

以上 文責 田嶋喜助（交流委員会委員長）

講演会は無料

懇親会参加費 学生無料、OB 3000円/人

参加申込は 早稲田応用化学会

〒169-8555 東京都新宿区大久保3-4-1

早稲田大学理工学部内 tel.03-3203-4141内線73-5253

Fax.03-5286-3892 E-mail:oukakai@kurenai.waseda.jp

小泉 宗栄

※応化会HP <http://www.waseda-oukakai.gr.jp> の講演会案内から講演会申し込みが出来ますし会場地図もごぞいます。

第1回応化会給付奨学生3名決定！

活性化委員会（募金委員会：河村宏委員長）の皆様のご尽力で設立された応化会給付奨学金の第1回奨学生が決定した。この奨学金制度は、多くの応用化学科卒業生のご寄付に基づく、国内の大学でも恐らく初めての試みで、募金額も、初年度の目標に近い額になっている。

2005年9月25日（日）午後2時30分～4時30分、応化会議室にて、応化会給付奨学生の選考を行った。選考は、応化会里見会長を委員長に、他6名（全7名）の推薦委員会（以下に示す）で構成し、5名の申請者を面接後、各審査員が、その結果を採点し、上位3名の候補者を推薦した。なお、選考に当たっては、本奨学金の趣意書にそって、経済的困窮度、博士課程への意志、研究に対する申請者の寄与度を判定基準にして、厳正な審査を行った。

平沢研 M1 三上貴司

武岡研 M2 小幡洋輔

酒井・小堀研 M2 小松 寛

10月6日の応用化学科教室会議にて、この推薦結果を審議して、第1回の応化給付奨学生が決定した。奨学生は、誓約書を提出して、応化会活動への積極的な寄与を約束した。

この制度が、修士課程の学生で、博士後期課程進学への強い意欲のある経済的に困窮する諸君を援助する奨学金として定着するために、応用化学科OB諸氏の一層のご支援をお願いする。

（河村、平沢記）

（注）なお、奨学金へのご寄付に際しては、下記次項にご留意の上、振り込みをお願い致します。また、事務局あてご送金頂ければ、事務局にて手続きを代行します。

1. 寄付金単位： 一口 5000円

10年間の活動を支えるため、極力複数口をお願い致します。

2. 寄付金振り込み先： 早稲田大学

みずほ銀行	高田馬場支店	普通	1215058
東京三菱銀行	江戸川橋支店	普通	0001029
りそな銀行	早稲田支店	普通	554909
三井住友銀行	高田馬場支店	普通	1844080
UFJ銀行	池袋支店	普通	9865

通信欄または備考欄に 理工学部応用化学科（奨学金）

とご記入下さい。

振り込み料は、指定銀行の本・支店を通して振り込むと無料です。

3. お振り込みをして頂いた後、「寄付申込書」を理工学部応用化学科あてにご送付下さい。

本申込書は応化会事務局にご請求頂ければご郵送あるいはFaxでもお送り致します。

また、応化会ホームページの募金案内からもダウンロードできます。

4. ATMによる振り込みは、事務手続きの関係から本奨学金として扱われません。時節柄ご面倒をお掛けして恐縮ながら、ATM利用は絶対に避け、窓口にて振り込み手続きをお願い致します。

2005年度定期総会報告

早稲田応用化学会

日 時：2005年 5 月23日（月）（午後4:30～5:20）
会 場：理工学部大久保校舎 S 棟 2 階第 3 会議室
出席者： 74 名

里見会長の挨拶があり、その後引き続き平沢庶務理事の司会により、下記の議案が諮られた。

- 議 案： 1. 2004年度事業報告
2. 2004年度収支決算報告承認の件
3. 監査報告
4. 2005年度事業計画並びに予算案承認の件
5. 早稲田応用化学会活性化委員会報告
6. 会則改訂の件
7. 役員一部改選の件
8. 名誉会員推薦
9. その他

議 事：総会に先立ち開催の2005年度第1回役員会にて得た議案につき審議した。

1. 2004年度事業報告の件
平沢庶務理事より2004年度の事業の報告が配布資料に沿って説明され、承認された。
2. 2004年度収支決算報告の件
菅原会計理事より、2004年度の決算について報告された後、清水（常）、本田会計監査より、決算に誤りのないことの報告がなされ、承認された。
3. 2005年度事業計画並びに予算案承認の件
配布資料に基づき2005年度の事業計画案が平沢理事より、続いて菅原理事より事業計画に基づいた予算案が説明提案された。
これに対し会員より、予算案中の雑収入について質問がなされ、名簿販売並びに企業ガイダンスWeb掲載収入との説明があった。
4. 名誉会員推薦の件
本年3月に定年退職された平田 彰教授が名誉会員として推薦承認された。
5. 早稲田応用化学会活性化委員会報告
中川活性化委員会委員長から各委員会（1.基盤強化委員会 2.広報委員会 3.募金委員会 4.交流委員会）の活動報告がなされた。
6. 会則改訂の件
平沢庶務理事より配布資料に基づき説明があり、承認された。ポイントは①評議委員会設立 ②活性化委員会設立 ③個人情報の項目作成である
7. その他（報告事項）
2005年度役員改選の件
副 会 長：黒田一幸→清水功雄
会計理事：菅原義之→本間敬之
監 事：清水常一→佐藤一男
更に、評議員の一部辞任及び交替が承認された。

以上

今回の会則で大幅に改訂した項目は、役員会の下部機関としての活性化委員会の設置、並びに評議員会の設置などである。

早稲田応用化学会会則

平成17年5月23日改訂

第1章 総 則

第1条（名称）本会は早稲田応用化学会という。

第2条（所在地）本会の事務局は早稲田大学理工学部応用化学科内に置く。

第3条（目的）本会は会員の学術的向上と会員相互の親睦を図り、併せて早稲田大学理工学部応用化学科の発展に寄与することを目的とする。

第2章 会 員

第4条（会員の構成）本会の会員は早稲田大学理工学部応用化学科の関係者をもって構成し、正会員、学生会員、特別会員、有志会員、名誉会員の5種類とする。

正会員……早稲田大学理工学部応用化学科および燃料化学科の卒業生ならびに早稲田大学大学院理工学研究科応用化学専攻の修了生、およびそれらの専任教員。なお工業経営学科の卒業生で応用化学科の卒業論文を選択したものを含む。

学生会員……早稲田大学理工学部応用化学科および早稲田大学大学院理工学研究科応用化学専攻の学生。

特別会員……会社、団体など法人にして本会の目的に賛同するもので、本会役員会の承認を得たもの。

有志会員……個人として本会の目的に賛同するもので、本会役員会の承認を得たもの。

名誉会員……本会に特別の貢献をなし、本会役員会の推薦を受け、総会の承認を得たもの。

第5条（会員の義務）会員は次の事項を守らなければならない。

1. 本会会則を遵守し、本会の事業運営に協力すること。

2. 本会の諸機関において決定された事項に従うこと。
3. 加入の年から会費を納入すること。
4. 住所、勤務先などの変更があったときは、速やかに事務局に連絡すること。

第3章 機 関

第6条（機関の種類）本会に次の機関を置く。

1. 総会
2. 役員会

第1節 総 会

第7条（総会の構成および開催）総会は本会会員をもって構成する。

総会は定期総会および臨時総会とする。

定期総会は原則として毎年春季に開催する。

第8条（臨時総会）次の場合は臨時総会を開くことができる。

1. 役員会が必要と認めたとき
2. 会員100名以上の要求があったとき

第9条（総会の承認事項）総会の承認を得なければならない事項は次の通りとする。

1. 会則の改訂
2. 年度事業報告および収支決算ならびに年度事業計画および収支予算
3. 会費の改訂
4. 会長の承認
5. 名誉会員の承認
6. その他必要と認める事項

第10条（総会の招集）総会は会長が招集する。

会則第8条による臨時総会開催のときは、会長は速やかにこれを招集しなければならない。

第11条（総会の議長）総会の議長は会長がこれをつとめる。

第12条（総会の決議）総会の承認は出席者の過半数によって決し、可否同数の場合は議長の決による。

第2節 役 員 会

第13条（役員会の構成）役員会は会長、副会長、理事、監事をもって構成する。

第14条（役員会の業務）役員会は本会運営に関する通常業務の処理を行う。また重要案件の立案を行い、これを総会に提出する。

第15条（役員会の招集）役員会の招集は必要に応じ会長がこれを行う。

第16条（役員会の議長）議長は会長がこれをつとめる。

第17条（役員会の成立）役員会は、3分の1以上の出席者をもって成立する。

第18条（役員会の決議）役員会の承認は出席者の過半数によって決し、可否同数の場合は議長の決による。

第19条（役員会への支援）第14条の役員会の業務を支援するため、役員会の下部機関として活性化委員会を置く。

第20条（活性化委員会の構成）活性化委員会は正会員有志をもって構成し、基盤強化、広報、交流、募金などの小委員会を置く。

第4章 役員

第21条（役員の構成）本会に次の役職者を置く。

1. 会長 1名
2. 副会長 3名以内
3. 理事 35名以内
4. 監事 2名

第22条（会長）会長は本会を代表し、会務を総括する。会長は役員会において正会員中より選出し、総会で承認を受ける。

第23条（副会長）副会長は会長を補佐し、会長に事故あるときその業務を代行する。副会長は役員会において正会員中より会長がこれを委嘱する。

第24条（理事）理事は正会員中より会長がこれを委嘱する。

第25条（監事）監事は会務の監査にあたる。監事は役員会において正会員中より会長がこれを委嘱する。

第26条（業務担当理事）会長は次の業務担当理事を委嘱する。

1. 会計理事若干名
2. 庶務理事若干名
3. 編集理事若干名

第27条（事務局）本会には会務を遂行するため事務局を設置し、会長が事務局員を任免する。

第28条（役員の任期）会長、副会長、理事、監事の任期は就任後第2回目の定期総会までとし、重任を妨げない。任期の途中で欠員を生じた場合は、直ちに後任者を決定する。この場合任期は前任者の残余期間とする。

第5章 評議員および評議員会

第29条（評議員）評議員は次の事項をつとめる。

1. 自主活動である同期会開催などにより、同級生の消息を把握し、本会の活動状況などを伝達するとともに意見を聴取して、評議員会で伝えるなど本会と同期会との連絡役として、本会の活性化に寄与する。
2. 自主活動である研究室同門会との連絡役として、1項と同様な活動により本会の活性化に寄与する。
3. 学生部会との連絡役として、1項と同様な活動により本会の活性化に寄与する。

第30条（評議員の選出）評議員は原則として次の通り会長が委嘱する。

1. 各卒業年度の会員中より若干名（100名未満は1～2名、100名以上は3名）
2. 自主活動である各研究室同門会の幹事または世話人より1名
3. 学生委員全員

第31条（評議員の任期）評議員の任期は、学生評議員を除き就任後2回目の定期総会までとし、重任を妨げない。任期の途中で欠員を生じた場合は、直ちに後任者を決定する。この場合任期は前任者の残余期間とする。

第32条（評議員会）本会との連絡機関として評議員会を設置する。会長が招集し、原則として毎年春季に定期評議員会を開催する。必要により臨時評議員会を開くことができる。評議員会では、本会の活動状況などを伝達し、また評議員より本会に対する会員の意見を聴取するなど本会の活性化に

寄与する。

第6章 学生委員および学生部会

第33条（学生部会）学生間の横断的活動を行うために、本会に学生会員から成る学生部会を置く。

第34条（学生委員）学生委員は学生部会の運営にあたる。

第35条（学生委員の選出および任期）学生委員は大学院修士課程学生より各学年2名および学部学生より各学年3名を選出する。学生委員の任期は当該学年度とする。

第7章 事業

第36条（事業）本会はその目的を達成するため、次の事業を行う。

1. 応用化学会報および会員名簿の発行
2. 応用化学会ホームページの運営
3. 講演会、研究会、見学会その他の行事の開催
4. 奨学金の運営
5. 早稲田大学理工学部応用化学科および早稲田大学大学院理工学研究科応用化学専攻に対する必要に応じた援助
6. その他本会の目的を達成するために必要な事業

第8章 会計

第37条（経費）本会の経費は会費および寄付金をもって支弁する。

第38条（会費の決定）会費の決定は総会の承認を要する。

第39条（会費の免除）次の会員は会費を免除することができる。

1. 名誉会員
2. 本人より申し出があった満75歳に達し、かつ最近20年間会費を完納した会員

第40条（会計年度）本会の会計年度は、毎年4月1日に始まり翌年3月31日に終わる。

第41条（決算、予算の承認）本会の決算、予算は総会の承認を要する。なお、決算書及び予算書は応用化学会報に掲載して会員に報告する。

第42条（細則）会計の細目については、別に役員会の定める「会計細則」による。

第9章 支部

第43条（支部）本会に関西支部を置く。また、会員数に応じその他の支部を置くことができる。

付 則

1. 本会則は平成17年5月23日より改訂施行する。
2. 本会の活動を円滑に進めるために、役員会の承認を得て必要な細則または内規などを定めることができる。
3. 本会会員および事務局は、本会の活動により知り得た個人情報の保護に留意する。



八甲田・雪の回廊 平中勇三郎(新14)
3月になると春を待ちかねて、7m余もある残雪を掘り進み「雪の回廊」を楽しみます。
「雪の回廊」が完成すると、春を待ちかねた市民が自動車の通行に開放される前にウォーキングを楽しみます。
(酸ヶ湯～谷地温泉間 平成14年3月31日撮影)

2004年度 会計報告

収 支 決 算 表

(2004年4月1日～2005年3月31日)

収 入		支 出	
適 用	金 額	適 用	金 額
前 年 度 繰 越 金	3,785,214	会 報 費	1,648,202
正 有 志 会 員 会 費	5,512,750	名 簿 作 成 費	3,173,333
学 生 会 員 会 費	1,099,500	集 会 費	314,386
寄 付 金	450	学 生 部 会 費	120,000
利 息	4,211	調 査 連 絡 費	0
広 告 代	1,110,000	集 金 費	162,909
雑 収 入	384,000	支 部 費	0
運 営 資 金 取 り 崩 し	0	用 品 費	204,350
名 簿 刊 行 積 立 金	0	事 務 費	4,328,873
		雑 費	17,080
		活 性 化 費	753,270
		運 営 資 金 繰 越 金	0
		予 備 費	1,173,722
(合 計)	11,896,125	(合 計)	11,896,125

2005年度予算案

収 入			支 出		
適用	金額	2004年度実績	適用	金額	2004年度実績
前年度繰越金	1,173,722	3,785,214	会 報 費	3,000,000	1,648,202
正有志会員会費	5,800,000	5,512,750	名 簿 作 成 費	0	3,173,333
学生会員会費	1,100,000	1,099,500	集 会 費	300,000	314,386
寄 付 金	0	450	学 生 部 会 費*	250,000	120,000
利 息	5,000	4,211	調 査 連 絡 費	100,000	0
広 告 代	0	1,110,000	集 金 費	200,000	162,909
雑 収 入	621,278	384,000	支 部 費	150,000	0
営業資金取り崩し	4,000,000	0	用 品 費	100,000	204,350
			事 務 費	4,300,000	4,328,873
			雑 費	1,030,000	17,080
			活 性 化 費**	2,562,520	753,270
			運営資金繰越金	0	0
			予 備 費	707,480	1,173,722
(合 計)	12,700,000	11,896,125	(合 計)	12,700,000	11,896,125

*新入生オリエンテーションへの補助150,000円を含む

**広報委員会：1,462,520円、基盤強化委員会：500,000円、
交流委員会500,000円、募金委員会：100,000円

「会費自動支払制度」登録のお願い

皆様には日頃より応用化学会の運営につきご協力賜り厚く御礼申し上げます。

皆様方には応化会の会費をお納め頂いていることご高承の通りですが、会費納入に際し「会費自動支払制度」をご利用頂くと、会費納入に際し郵便局へお出かけ頂く必要もなく、且つ年会費が2,850円となります。この際の「会費自動支払制度」への登録を応用化学会事務局を通してお願い致します。本制度の特徴は以下の通りです。

- (1) 毎年4月18日に自動的に指定口座から引落としとなります。
- (2) 全国の都市銀行、主要な地方銀行、信託銀行及び全国郵便局等の口座から自動支払が利用頂けます。
- (3) 本制度をご利用頂いた場合には、年会費は年額2,850円となります。

尚、手続きについては、事務局までご連絡下さい。

応用化学会事務局 TEL：03-3203-4141（内線：73-5253）

FAX：03-5286-3892

Eメール：oukakai@kurenai.waseda.jp

会員名簿のご案内

会員名簿（2003年版）を引き続き発売をしております。

応用化学会の会員名簿（2003年度版）は2004年2月に発行されましたが、まだ名簿も多数残っておりますので、ご希望の方はご購入下さい。頒布価格は、一般会員4,000円、大学院、学生は1,500円です。

申し込み方法

名簿購入ご希望の方は、この会報に挟んである郵便振替用紙に、名簿購入希望と記載して頂き、会費納入とは別に、名簿代として4,000円をお支払い下さい。

ご逝去

上原 昭彦殿（燃料6回）2005年4月
砂原 章秀殿（旧 21回）2005年3月27日
田中 耕殿（新 4回）2005年2月
安達 裕殿（新 36回）2005年1月
岡本三郎助殿（工経13回）2005年1月
中村 良英殿（新 9回）2004年4月17日
小沢三千夫殿（新 3回）2003年12月
駒田 康隆殿（新 13回）2003年9月4日
今淵 淳夫殿（新 13回）2003年9月
水科 元安殿（旧 14回）2003年9月

合田 克巳殿（旧 28回）2002年10月30日
宮本 高男殿（新 6回）2001年
大住 欣一殿（燃料2回）2000年9月22日
川端郁太郎殿（旧 21回）1999年2月
山本 久臣殿（新 16回）1999年
岡本喜久男殿（新 3回）
宍倉 幸一殿（有志会員）
上田 実殿（工経14回）1992年
岡田 一利殿（新 16回）1992年

編集後記

今回の会報は「応化会活性化特集号」ということで、昨年からスタートした各活性化委員会からこの1年間の活動の中で、皆さんの忌憚のない思いを書いて頂きました。この活動が長く続き、元気で魅力のある早稲田応化会に皆様と共に歩んでいければと切に思う次第です。今回の表紙絵は、描いて頂いた早稲田大学藪野 健教授から以下のような説明を頂きました。

20世紀初めの早稲田大学です。左から商学部、大隈重信大礼服銅像、恩賜館、奥に理工学部応用化学科など、法学部、旧図書館書庫、右が政経学部。木造は保岡勝也設計。赤煉瓦の恩賜館は慶應義塾図書館と同じ設計で曾根中條事務所による。残念ながら、1945年空襲で焼け、後に取り壊された。復興計画の声もあるとのこと。

(小泉宗栄)



役員

(会長)

里見 多一

(庶務理事)

平沢 泉

大林 秀仁

(理事～学外)

池内 晴彦

井上 成之

坪井 彦忠

三田 宗雄

鶴岡 洋幸

倉持 誠

津田 信吾

峰島三千男

藤城 光一

赤田 正典

(理事～学内)

菊地 英一

酒井 清孝

竜田 邦明

逢坂 哲彌

西出 宏之

黒田 一幸

木野 邦器

桐村光太郎

菅原 義之

武岡 真司

(副会長)

清水 功雄

長谷川吉弘

(会計理事)

本間 敬之

(編集理事)

藤本 瞭一

松方 正彦

(監事)

本田 尚士

佐藤 一男

早稲田応用化学会報 通算72号 2005年 11月 発行

編集兼発行人 藤本 瞭一・松方 正彦

発行所 早稲田応用化学会

印刷所 大日本印刷 (株)

〒169-8555 東京都新宿区大久保3-4-1 早稲田大学理工学部に

TEL (03)3209-3211内線5253 Fax (03)5286-3892

郵便振替0019-4-62921

E-mail:oukakai@kurenai.waseda.jp

http://www.waseda-oukakai.gr.jp



早稲田応用化学会

The Society of Applied Chemistry of Waseda University

E-mail: oukakai@kurenai.waseda.jp

ホームページ: <http://www.waseda-oukakai.gr.jp>